

ガラテヤ人への手紙 1 回

「あいさつ」

ガラ 1 : 1～5

1. はじめに

(1) ガラテヤ人への手紙の位置づけ

- ①特定の教会や個人ではなく、ガラテヤ地方の複数の教会に宛てられたもの。
- ②2 節に、「ガラテヤの諸教会」と書かれている。
- ③パウロは、第 1 次伝道旅行でこの地方に複数の教会を設立した（地図）。
 - *ピシデヤのアンテオケ、イコニオム、ルステラ、デルベの諸教会
- ④パウロが設立した諸教会を、ユダヤ主義者と呼ばれる人々が訪問した。
 - *彼らは、元パリサイ派で、律法を守ることに固執していた。
 - *エルサレム教会は、ユダヤ主義者の立場に反対していた。
 - *ユダヤ主義者よりも、律法主義者という名称の方がよい。
- ⑤パウロは、律法主義者の教えを論駁するために、この書簡を書いた。
- ⑥アンテオケで紀元 48 年頃に執筆したと思われる。
 - *タイミングは、エルサレム会議の前である。

(2) ガラテヤ人への手紙の特徴

- ①ローマ人への手紙の短縮版である。
- ②ローマ人への手紙は、ガラテヤ人への手紙の拡大版である。
- ③宗教改革の土台となった書簡である。
- ④キリスト者の「マグナ・カルタ」（自由の大憲章）と言われる。

(3) ガラテヤ人への手紙のアウトライン

- ①個人的弁明：パウロの使徒職（1 : 1～2 : 21）
- ②教理的教え：信仰義認（3 : 1～4 : 31）
- ③実践的教え：キリスト者の自由（5 : 1～6 : 18）

2. メッセージのアウトライン

- (1) 差出人（1 節）
- (2) 宛先（2 節）
- (3) あいさつ（3 節）
- (4) 頌栄（4～5 節）

3. 結論

(1) 使徒職の弁明

(2) パウロが伝えた福音

ガラテヤ人への手紙のあいさつについて学ぶ。

I. 差出人 (1 節)

1. 1 節

Gal 1:1 人々から出たのではなく、人間を通してでもなく、イエス・キリストと、キリストを死者の中からよみがえらせた父なる神によって、使徒とされたパウロと、

(1) ギリシア語では、最初に「パウロ」という名前が出て来る。

- ①この手紙を書いているのは、誰だろうパウロである。
- ②あなたがたをキリストに導き、ガラテヤの諸教会を設立したパウロである。
- ③ヘブル名はサウロ、ラテン名はパウロである。
- ④異邦人に向けて書いているので、ラテン名を使用している。

(2) 続いて、「使徒」というタイトルが出て来る。

- ①ギリシア語では「アポストロス」である。
- ②このタイトルは、パウロのアイデンティティを証明するためのものである。
- ③言葉の位置から、このタイトルが強調されていることが分かる。
- ④ガラテヤの諸教会には、パウロの使徒職を疑う者たちがいた。
- ⑤パウロは、自分は 12 使徒とは異なる別の範疇の使徒であると主張する。

(3) パウロは、誰から使徒に任命されたのか。

- ①人間がこの任命の源になっている訳ではない。
 - *エルサレム教会の重鎮たちではない。
- ②人間というチャネルを通してこの任命が与えられた訳でもない。
 - *アンテオケ教会の長老たちでもない。
- ③任命者は、イエス・キリストと父なる神である。
- ④律法主義者との対比は鮮明である。
 - *彼らは、エルサレム教会から派遣されたかのように振る舞った。
 - *実際は、エルサレム教会から認定を受けたわけではなかった。
 - *律法主義者たちは、人からの権威も、神からの権威も受けていなかった。
- ⑤パウロは、イエス・キリストと父なる神から任命を受けた。
 - *父なる神は、キリストを死者の中からよみがえらせたお方である。
 - *信者の復活は、キリストの死と復活によって保証されている。
 - *キリストの復活は、初穂としての復活である。

- * 初穂は、それに続く収穫を保証している（初穂は、ヘブル的イメージ）。
- ⑥ 死後の復活の希望は、キリスト教と他の宗教を区別する特徴である。

Ⅱ. 宛先（2 節）

1. 2 節

Gal 1:2 私とともにいるすべての兄弟たちから、ガラテヤの諸教会へ。

- (1) 通常パウロは、手紙には 2 人の名前までしか書かない。
 - ① テサ 1:1 では、シルワノとテモテの名が書かれている。
 - ② テサ 1:1 でも、同じである。
 - ③ パウロは、少人数で移動していた。
 - ④ 彼らは、パウロのメッセージと宣教の証人たちである。
- (2) ここでは、「私とともにいるすべての兄弟たち」となっている。
 - ① これは、この手紙がアンテオケで執筆されたことの証拠である。
- (3) 宛先は、ガラテヤの諸教会である。
 - ① パウロが、第 1 次伝道旅行で設立した教会である。
 - * ピシデヤのアンテオケ、イコニオム、ルステラ、デルベ
 - ② これらの教会には、ユダヤ人信者と異邦人信者がいた。
 - ③ この手紙は、回覧書簡である。

Ⅲ. あいさつ（3 節）

1. 3 節

Gal 1:3 私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにありますように。

- (1) ギリシア語では、「恵みと平安」という言葉がこの文の冒頭に出て来る。
 - ① これは単なる挨拶の言葉ではなく、パウロ神学の本質を突いた言葉である。
 - ② 彼の書簡は、常にこの挨拶で始まる。
 - * 過ちを矯正するための手紙にも、この挨拶を使っている。
 - ③ 例外は、2 つのテモテへの手紙である。
 - * 「恵みとあわれみと平安がありますように」
 - * テモテは、「あわれみ」を必要としていた。
- (2) 「恵み」は、ギリシア語で「カリス」である。

- ①恵みとは、神が一方的な愛に基づいて罪人に示してくださる好意のこと。
- ②さらに、この愛は契約に基づく愛である。
- ③「恵み」は、パウロ神学のキーワードとして、最も重要なものである。
- ④ヨハネも恵みに関して同じ確信を持っていた（ヨハ1:16～17）。

Joh 1:16 私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けた。

Joh 1:17 律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。

- (3) 「平安」は、ギリシア語で「エイレイネイ」である。

- ①これは、ヘブル語の「シャローム」以上の意味を持つ言葉である。
- ②ヨハ14:27

Joh 14:27 わたしはあなたがたに平安を残します。わたしの平安を与えます。わたしは、世が与えるのと同じようには与えません。あなたがたは心を騒がせてはなりません。ひるんではなりません。

- ③ピリ4:7

Php 4:7 そうすれば、すべての理解を超えた神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

- (4) 「恵みと平安」という言葉の順番は、不変である。

- ①恵みは、基本となる祝福であり、平安の原因である。
- ②平安は、恵みがもたらす結果である。
- ③「恵みと平安」は、どこから来るのか。
 - *父なる神から来る。
 - *また、主イエス・キリストから来る。
- ④人生の成功を判定する基準は、「平安」である。

IV. 頌栄（4～5節）

1. 4節

Gal 1:4 キリストは、今の悪の時代から私たちを救い出すために、私たちの罪のためにご自分を与えてくださいました。私たちの父である神のみこころにしたがったのです。

- (1) ここまで書いて、パウロは神の御名を称えずにはおれなくなった。

- ①頌栄は、単なる区切りでも、空白を埋めるための言葉でもない。
- ②神学的思索が、パウロを礼拝へと導いたのである。
 - *「礼拝のない神学はなく、神学のない礼拝もない」

(2) 恵みと平安の源である主イエス・キリストをほめ称える理由は何か。

①キリストは、私たちの罪のためにご自身を与えてくださった。

*信者は、イザヤ 53 章の「受難のしもべ」を思い出したはずである。

*キリストの犠牲によって、私たちの罪は赦された。

②その目的は、今の悪の時代から私たちを救い出すためである。

*信者は、創世 3 : 15 の「女の子孫」を思い出したはずである。

*「女の子孫」は、蛇の頭を打ち砕く。

*信者は、「今の悪の時代」から救い出された。

*信者は、聖霊に導かれて信仰によって歩む。

*律法に導かれて歩むのではない。

*律法主義者の教えは、「今の悪の時代」の一部である。

③キリストの御業は、父なる神の御心に従ったものである。

2. 5 節

Gal 1:5 この神に、栄光が世々限りなくありますように。アーメン。

(1) この神とは、主イエス・キリストと父なる神である。

①パウロは、神の偉大さに打たれている。

(2) 御子イエスは、父なる神に従順に従うことによって、神の栄光を表わした。

①御子イエスによって救われた信者も、神の栄光を表わすように召された。

②神は、救われた人たちからのみ、栄光をお受けになる。

③律法主義者は、神にではなく、自分に栄光を帰している。

④詩 29 : 1~2

Psa 29:1 力ある者の子らよ。【主】に帰せよ。／栄光と力を【主】に帰せよ。

Psa 29:2 御名の栄光を【主】に帰せよ。／聖なる装いをして【主】にひれ伏せ。

(3) 「アーメン」は、ヘブル語である。

①申 7 : 9 の「主は信頼すべき神であり」は、「アーメンなる神」である。

②イザ 49 : 7 の「真実である【主】」は、「アーメンなる【主】」である。

③新約聖書では、「その通りです」「そのようになりますように」である。

④主イエスは、重要な内容を話す際に、「アーメン、アーメン」と言われた。

⑤黙 3 : 14 の「アーメンである方」は、イエス・キリストである。

(4) ユダヤ教の会堂では、朗詠の中に「アーメン」が何度も出て来る。

①会衆は、「アーメン」で応じる。

- ②パウロは、ここで述べた単純な福音に「アーメン」という応答を要求した。
- ③ガラテヤのクリスチャンたちは、「アーメン」と応じた。
- ④それでもなお律法主義に生きるなら、それは矛盾である。

結論

- 1. 使徒職の弁明
- 2. パウロが伝えた福音

1. 使徒職の弁明

(1) 「使徒」とは、本来はイエス・キリストの 12 弟子である。

①イスカリオテのユダに代わってマッテヤが選ばれた（使 1：21～22）。

Act 1:21 ですから、主イエスが私たちと一緒に生活しておられた間、

Act 1:22 すなわち、ヨハネのバプテスマから始まって、私たちを離れて天に上げられた日までの間、いつも私たちと行動をともにした人たちの中から、だれか一人が、私たちとともにイエスの復活の証人とならなければなりません。」

②ここでは、使徒の条件が示されている。

*公生涯の間、イエスと行動をともにした。

*復活のイエスに出会った。

(2) 「使徒」の一般的な意味は、「遣わされた者」「使者」である。

①この意味に立てば、宣教師と伝道者はすべて、使徒である。

②2 コリ 8：23

2Co 8:23 テトスについて言えば、彼は私の仲間であり、あなたがたのために働く同労者です。私たちの兄弟たちについて言えば、彼らは諸教会の使者であり、キリストの栄光です。

*テトスは、パウロの同労者である。

*兄弟たち（パウロが遣わす他の 2 人の兄弟）は、使者である。

・ギリシア語の「アポストロス」である。

・日本語で「使者」、英語で「messengers」と訳されている。

③ピリ 2：25

Php 2:25 私は、私の兄弟、同労者、戦友であり、あなたがたの使者で、私の必要に仕えてくれたエパフロディトを、あなたがたのところに送り返す必要があると考えました。

*エパフロディトは、「使者」（アポストロス）である。

④ヘブ 3：1

Heb 3:1 ですから、天の召しにあずかっている聖なる兄弟たち。私たちが告白する、使徒であり大祭司であるイエスのことを考えなさい。

*イエスは、父なる神から派遣されたという意味で使徒（アポストロス）。

(3) パウロは、12 使徒とは別の範疇の使徒である。

①バルナバもまた、この範疇に入る使徒である（使 14：14）。

②復活のイエスに出会ったことが、第 2 グループの使徒の条件である。

③使 9：3～4

Act 9:3 ところが、サウロが道を進んでダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。

Act 9:4 彼は地に倒れて、自分に語りかける声を聞いた。「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。」

④使 9：17

Act 9:17 そこでアナニアは出かけて行って、その家に入り、サウロの上に手を置いて言った。「兄弟サウロ。あなたが来る途中であなたに現れた主イエスが、私を遣わされました。あなたが再び見えるようになり、聖霊に満たされるためです。」

⑤1 コリ 15：8～9

1Co 15:8 そして最後に、月足らずで生まれた者のような私にも現れてくださいました。

1Co 15:9 私は使徒の中では最も小さい者であり、神の教会を迫害したのですから、使徒と呼ばれるに値しない者です。

2. パウロが伝えた福音

(1) ガラテヤの諸教会の誤りを正すという意図が、すでに見えている。

①クリスチャンは、今の悪の時代から救い出された。

②復活の希望が与えられている。

③その基になっているのは、イエス・キリストの贖いの業である。

④イエス・キリストの御業は、父なる神の御心に従ったことである。

⑤決して、人間の業ではない。

⑥それゆえ、クリスチャンは神の御名を称えるのである。

ガラテヤ 2 回
「ほかに福音はない」
ガラ 1 : 6～10

1. はじめに

(1) ガラテヤ人への手紙の位置づけ

- ①特定の教会や個人ではなく、ガラテヤ地方の複数の教会に宛てられたもの。
- ②パウロは、第 1 次伝道旅行でこの地方に複数の教会を設立した（地図）。
- ③パウロが設立した諸教会を、ユダヤ主義者と呼ばれる人々が訪問した。
- ④パウロは、ユダヤ主義者の教えに反論する必要を感じ、この書簡を書いた。
 - *アンテオケで紀元 48 年頃に執筆したと思われる。
 - *タイミングは、エルサレム会議の前である。

(2) ガラテヤ人への手紙のアウトライン

- ①個人的弁明：パウロの使徒職（1 : 1～2 : 21）
- ②教理的教え：信仰義認（3 : 1～4 : 31）
- ③実践的教え：キリスト者の自由（5 : 1～6 : 18）

2. メッセージのアウトライン

- (1) 驚くべき逸脱（6～7 節）
- (2) 呪いの宣言（8～9 節）
- (3) キリストの僕としての心構え（10 節）

3. 結論

- (1) ほかの福音
- (2) パウロと律法

パウロの叱責について学ぶ。

I. 驚くべき逸脱（6～7 節）

1. 6 節

Gal 1:6 私は驚いています。あなたがたが、キリストの恵みによって自分たちを召してくださった方から、このように急に離れて、ほかの福音に移って行くことに。

(1) 「あいさつ」に続いて「ほめ言葉」を語るのが、パウロの手紙の特徴である。

1Co 1:4 私は、キリスト・イエスにあってあなたがたに与えられた神の恵みのゆえに、あなたがたのことをいつも私の神に感謝しています。

1Co 1:5 あなたがたはすべての点で、あらゆることばとあらゆる知識において、キリストにあって豊かな者とされました。

①リーダーの役割のひとつは、ともに働く人たちの長所を見つけ、ほめること。

(2) この手紙では、ほめ言葉がなく、「私は驚いています」が最初に出て来る。

①「驚いている」は、ギリシア語で「サウマゾー」である。

②継続した状態を指す現在形である。

「私は驚いています」(新改訳 2017)

「…あきれ果てています」(新共同訳)

「…わたしには不思議でならない」(口語訳)

「我は…怪しむ」(文語訳)

「ほんまかいな」「あり得へん」(大阪弁)

(3) 驚きの原因

①自分たちを召してくださった神から、このように急に離れて行く。

*罪人をこの世から召し出してくださるのは、神である。

*パウロは、神の召しを罪人に伝えるための代理人である。

②「ほかの福音に移って行く」

*そうでない信者もいたであろうが、全体としては逸脱しつつあった。

*パウロは、このようなことは予期していなかったと思われる。

(4) 「離れて」という動詞は、ギリシア語で「メタティセイミ」である。

①継続した動作を示す現在形である。

②彼らは、恵みによって生きるという確信を放棄しつつある。

③「メタティセイミ」は、敵前から逃亡することを意味する動詞である。

④昔も今も、逃亡兵は軍事裁判にかけられ、死刑が宣告される。

⑤福音からの逸脱は、それほど重大な罪である。

(5) 逸脱の責任は誰にあるのか。

①偽教師たちがガラテヤ教会の信徒たちを惑わせた。

*彼らは、いわゆるユダヤ主義者である。

②ガラテヤ教会の信徒たちは、自らの意志で「ほかの福音」に移りつつあった。

2. 7 節

Gal 1:7 ほかの福音といっても、もう一つ別に福音があるわけではありません。あなたがたを動揺させて、キリストの福音を変えてしまおうとする者たちがいるだけです。

- (1) パウロは、「ほかの福音」が誤解を生みやすい言葉であることに気づいた。
- ①福音はいくつもあるのかという疑問が湧いて来る。
 - ②そこでパウロは、「もう一つ別に福音があるわけではありません」と書く。
 - ③偽教師たちは、キリストの福音を別のものに変えようとしている。
 - *偽教師たちが誰であるかは、書いていない。
 - *彼らが、エルサレムから下って来た教師たちであるとも書いていない。
- (2) 偽教師たちとは、ユダヤ主義者たちである。
- ①彼らは、ユダヤ人信者で、ユダヤ教の律法主義を推奨する人たちである。
 - *ユダヤ教は、モーセの律法(613)以外に口伝律法を認めた。
 - *神はモーセに、書かれた律法と口伝律法を与えた。
 - *両者には、等しい権威がある。
 - *今も、メシアニックジューの中には、救いと清めの条件として、律法を守ることを主張する人たちがいる。
 - ③律法主義者の教えは、恵みと信仰によって救われるという教えと矛盾する。
- (3) 教理的逸脱に対するパウロの応答
- ①教理的逸脱に対する寛容な姿勢は、とうてい赦されない。
 - *誤った教理は、ガン細胞のようである。
 - *聖書では、パン種という言葉がよく使われる。
 - ②パウロは、教理的逸脱に真っ正面からぶつかって行く。
 - ③パウロは、教理的逸脱に義憤を覚えている。

II. 呪いの宣言(8~9節)

1. 8節

Gal 1:8 しかし、私たちであれ天の御使いであれ、もし私たちがあなたがたに宣べ伝えた福音に反することを、福音として宣べ伝えるなら、そのような者はのろわれるべきです。

- (1) パウロは、偽教師たちに対して永遠の呪いを宣言する。
- ①ギリシア語で「アナテマ」である。
 - ②仮定として、自分自身や天使まで引き合いに出している。
 - ③これは、「アナテマ」の厳粛さを示すための表現である。
 - ④旧約聖書にも、偽預言者への呪いの宣言が出て来る(申18:20)。

Deu 18:20 ただし、預言者であっても、わたしが告げよと命じていないことを、不遜にもわたしの名によって告げたり、あるいは、ほかの神々の名によって告げたりする者がいるなら、その預言者は死ななければならない。」

(2) 「私たちがあなたがたに宣べ伝えた福音」

①バルナバ

Act 13:13 パウロの一行は、パポスから船出してパンフィリアのペルゲに渡ったが、ヨハネは一行から離れて、エルサレムに帰ってしまった。

②シラス

Act 15:40 パウロはシラスを選び、兄弟たちから主の恵みにゆだねられて出発した。

③シラスとテモテ

Act 16:3 パウロは、このテモテを連れて行きたかった。それで、その地方にいるユダヤ人たちのために、彼に割礼を受けさせた。彼の父親がギリシア人であることを、皆が知っていたからである。

Act 16:4 彼らは町々を巡り、エルサレムの使徒たちと長老たちが決めた規定を、守るべきものとして人々に伝えた。

④パウロが宣べ伝えた福音は、完璧で完成したものである。

2. 9 節

Gal 1:9 私たちが以前にも言ったように、今もう一度、私は言います。もしだれかが、あなたがたが受けた福音に反する福音をあなたがたに宣べ伝えているなら、そのような者はのろわれるべきです。

(1) 再度、異なった福音を伝える者に対して、呪いが宣告される。

①「以前にも言った」は、明確に警告を発したという意味である。

②その内容を理解してもらうために、再度言う。

③パウロは、使徒の権威を用いて、ユダヤ主義者の上に呪いを宣言している。

Ⅲ. キリストの僕としての心構え (10 節)

1. 10 節

Gal 1:10 今、私は人々に取り入ろうとしているのでしょうか。神に取り入ろうとしているのでしょうか。あるいは、人々を喜ばせようと努めているのでしょうか。もし今なお人々を喜ばせようとしているのなら、私はキリストのしもべではありません。

(1) ユダヤ主義者の策略

①パウロの使徒としての正当性に疑問を投げかける。

*パウロは、自分で自分を使徒に任命したのではないか。

*自分に従う人たちを集めているのではないか。

②神学的議論では勝てないので、パウロの信頼性を切り崩そうとする。

(2) 反ユダヤ主義者の策略は、かなりの程度成功した。

①それゆえ、パウロは自らの使徒としての正当性を弁明する必要性を感じた。

②初代教会においては、12使徒の正当性が疑われたことはない。

＊クジで選ばれたマッティアでさえも、使徒と認定された。

③パウロの場合は、すべてが異例であった。

＊パリサイ人で教会を迫害した人物である。

＊イエスの公生涯の間、ともに生活したわけではない。

＊「異邦人の使徒」(ロマ11:13)を自認していた。

(3) 「今、私は人々に取り入ろうとしているのでしょうか」

①(新改訳2017)は、ギリシア語の「gar」を「今」と訳している。

＊「では」、「こんなことを言って」(新共同訳)も可能である。

②「神に取り入ろうとしているのでしょうか」

③もし人々に取り入ろうとしているのなら、呪いを宣告しないはずである。

(4) 「もし今なお人々を喜ばせようとしているのなら、私はキリストのしもべではありません」

①パウロは、口伝律法を放棄した。

結論

1. ほかの福音

2. パウロと律法

1. ほかの福音

(1) 「ほかの福音」とは、「同質」ではなく、「異質」という意味である。

(2) 「恵みと信仰のみで救われる」という福音に、別の要素を付け加えること。

①義認は信仰によるが、きよめは業によるという教え

②ユダヤ教の各種の祭りや行事を義務化すること。

③モーセの律法や口伝律法によって義と認められようとする事。

④異邦人に割礼を受けさせるなら、それは「ほかの福音」である。

2. パウロと律法

(1) ピリ3:7

Php 3:7 しかし私は、自分にとって得であったこのようなすべてのものを、キリストのゆえに損と思うようになりました。

Php 3:8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、私はすべてを損と思っています。私はキリストのゆえにすべてを失いましたが、それらはちりあくただと考えています。それは、私がキリストを得て、

Php 3:9 キリストにある者と認められるようになるためです。私は律法による自分の義ではなく、キリストを信じることによる義、すなわち、信仰に基づいて神から与えられる義を持つのです。

(2) 以前は誇りと思っていた事がらを、今は損と思うようになった。

①キリストの十字架によって、恵みの時代が始まった。

②割礼は不要となり、旧約聖書にあるさまざまな儀式もその役割を終えた。

③律法は人をキリストから切り離し、束縛の中に閉じ込める。

(3) キリストを知ることこそ、最高に素晴らしいことである。

①キリストのためにすべてを捨てたが、それを「ちりあくた」と思っている。

②「ちりあくた」とは、犬に投げ与える食べ物のことである。

(4) 律法による義ではなく、信仰を通しての義が与えられる望みがある。

(5) 今日も MJ の中には、律法やユダヤ的ライフスタイルを守ることが神に喜ばれると信じている人がたくさんいる。

①彼らは、救いや清めは、律法によって与えられると考えている。

②彼らは偽教師である。

③キリスト者の自由を奪われてはならない。

ガラテヤ 3回
「神から啓示された福音（1）」
ガラ 1：11～17

1. はじめに

(1) ガラテヤ人への手紙の位置づけ

- ①パウロは、第1次伝道旅行でガラテヤ地方に複数の教会を設立した。
- ②パウロが設立した諸教会を、ユダヤ主義者と呼ばれる人々が訪問した。
 - *ユダヤ主義者の本来の意味は、ユダヤ的伝統に従って生活する人。
 - *ガラテヤ書の文脈では、ユダヤ主義者は律法主義者である。
- ③パウロは、律法主義者の教えに反論する必要を感じ、この書簡を書いた。
 - *タイミングは、エルサレム会議の前である。

(2) ガラテヤ人への手紙のアウトライン

- ①個人的弁明：パウロの使徒職（1：1～2：21）
- ②教理的教え：信仰義認（3：1～4：31）
- ③実践的教え：キリスト者の自由（5：1～6：18）

2. メッセージのアウトライン

- (1) パウロの福音（11～12節）
- (2) 回心前の出来事（13～14節）
- (3) 回心時の出来事（15～17節）
- (4) 回心後の出来事（18～24節）
 - *今回は、(1)～(3)を取り上げる。

3. 結論

- (1) 胎内にあるときからの選び
- (2) 先祖の伝承

神から啓示された福音について学ぶ。

I. パウロの福音（11～12節）

1. 11節

Gal 1:11 兄弟たち、私はあなたがたに明らかにしておきたいのです。私が宣べ伝えた福音は、人間によるものではありません。

- (1) ここでパウロは、ガラテヤ人たちがすでに知っていることを確認する。
 - ①「明らかにする」は、ギリシア語で「グノリゾウ」である。

*はじめての情報を明確に伝えるという意味がある。

*すでに知られていることを、再度明確に伝えるという意味もある。

*ここでは、2番目の意味でこの言葉が使われている。

②1 コリ 15 : 1

1Co 15:1 兄弟たち。私があなたがたに宣べ伝えた福音を、改めて知らせます。あなたがたはその福音を受け入れ、その福音によって立っているのです。

*この聖句では、「改めて知らせます」が「グノリゾウ」である。

Gal 1:11 兄弟たち、私はあなたがたに明らかにしておきたいのです。私が宣べ伝えた福音は、人間によるものではありません。

(2) パウロの福音は、「人間によるものではない」。

①「よるもの」は、ギリシア語で「カタ」である。

②人間の作品ではない。人間の考えによるものでもない。

2. 12 節

Gal 1:12 私はそれを人間から受けたのではなく、また教えられたのでもありません。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。

(1) パウロの福音は、人間から受けたものでも、教えられたものでもない。

①パウロがこう書くのは、律法主義者たちがそのように非難していたから。

②パウロの反論

*タルソの大学で教えられたのでも、ガマリエルから学んだのでもない。

*エルサレムの使徒たちから受けたのでもない。

(2) パウロの福音は、イエス・キリストの啓示によって与えられたものである。

①パウロは、「私の福音」という言葉を使う（ロマ 2 : 16）。

Rom 2:16 私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって、人々の隠された事柄をさばかれるその日に行われるのです。

②神が、罪人に伝えるために、自分に啓示してくださった福音という意味。

*その内容は、キリストの死、埋葬、復活である（1 コリ 15 : 1～3）。

*パウロに独特な教えは、「位置的真理」（In Christ）である。

Gal 1:12 私はそれを人間から受けたのではなく、また教えられたのでもありません。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。

(3) パウロは、生きた奇跡である。

①ダマスコ途上での、主イエス・キリストとの超自然的な出会い。

*主の命令に従ってダマスコに入って行ったのは、救われたことの証明。

②主は、敬虔なユダヤ人信者であるアナニアにこう言われた（使9：15）。

Act 9:15 しかし、主はアナニアに言われた。「行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子らの前に運ぶ、わたしの選びの器です。」

③直ちに聖霊に満たされ、ダマスコで伝道を開始した（使9：17）。

Act 9:17 そこでアナニアは出かけて行って、その家に入り、サウロの上に手を置いて言った。「兄弟サウロ。あなたが来る途中であなたに現れた主イエスが、私を遣わされました。あなたが再び見えるようになり、聖霊に満たされるためです。」

④イエスは神の子であると宣べ伝え始めた（使9：20）。

Act 9:20 ただちに諸会堂で、「この方こそ神の子です」とイエスのことを宣べ伝え始めた。

II. 回心前の出来事（13～14節）

1. 13節

Gal 1:13 ユダヤ教のうちにあった、かつての私の生き方を、あなたがたはすでに聞いています。私は激しく神の教会を迫害し、それを滅ぼそうとしました。

(1) パウロは、自分の回心体験を再度伝えるのが重要だと考えた。

①ガラテヤ人たちは、パウロとバルナバが宣教した際、パウロの証しを聞いた。

(2) 「かつて」のパウロは、ユダヤ教に熱心であった。

①「かつて」は、ギリシア語で「ポテ」、英語で「in time past」である。

*今は、そうではない。

②その熱心さは、神の教会を迫害し、それを滅ぼそうとしたほどであった。

*「激しく」は、「徹底的に」（新共同訳）ということである。

③当時のユダヤ教の熱心さのモデルは、ピネハスやユダ・マカバイである。

*ピネハスは、ミディアン人の女と交わる者を殺した（民25章）。

*ユダ・マカバイは、マカバイ戦争を指導し、シリアからの独立を達成した前2世紀の民族的英雄である。そこからハスモン朝が誕生した。

④パウロは、クリスチャン（神の敵）が殺されることを喜びとしたのであろう。

⑤「神の教会」という言葉は、救われてから認識した事実を表わしている。

2. 14節

Gal 1:14 また私は、自分の同胞で同じ世代の多くの人に比べ、はるかにユダヤ教に進んでおり、先祖の伝承に人一倍熱心でした。

(1) 「ユダヤ教に進んでおり」とは、「道を切り拓く」という意味である。

①彼は、同世代の者たちの先頭に立ち、ユダヤ教を推進していた。

- (2) 彼は、キリストがメシア預言の成就であることを理解していなかった。
- ①彼は、メシアの死、埋葬、復活の意味を理解していなかった。
 - ②彼は、ユダヤ教の伝統に固執するという点では、誰にも負けなかった。
 - ③彼は、ユダヤ教のことを知らないわけではない。
 - ④かつての彼は、その中にどっぷりと浸かり、律法主義の旗振りをしていた。
 - ⑤従って、律法主義の魅力と危険性については、熟知している。
 - ⑥そのような頑固な人物の心を変えられるのは、神だけである。

Ⅲ. 回心時の出来事（15～17節）

1. 15節

Gal 1:15 しかし、母の胎にあるときから私を選び出し、恵みをもって召してくださった神が、

- (1) 神は、パウロのために計画を用意しておられた。
- ①母の胎にあるときから、神はパウロを選んでおられた。
 - ②神は、恵みをもってパウロを召された。
 - ③パウロの救いは、偶然ではなかった。
- (2) 「母の胎にあるときからの選び」は、ユダヤ人信者に対して説得力があった。
- ①旧約聖書に出て来る概念である。
 - ②これは、中絶反対の聖書的根拠になる聖句である。
 - ③胎児はすでに人であり、神の目が注がれている。
 - ④中絶論争の根底にあるのは、神の主権を巡る世界観の対立である。

2. 16～17節

Gal 1:16 異邦人の間に御子の福音を伝えるため、御子を私のうちに啓示することを良しとされたとき、私は血肉に相談することをせず、

Gal 1:17 私より先に使徒となった人たちに会うためにエルサレムに上ることもせず、すぐにアラビアに出て行き、再びダマスコに戻りました。

- (1) パウロの使命は、御子の福音を異邦人に伝えることである。
- ①神は、御子をパウロのうちに啓示し、異邦人に福音を伝えようとされた。
 - ②パウロは、異邦人の救いを心から願った。
- (2) パウロの伝道には、あるルールがあった。
- ①まずユダヤ人の会堂に行き、ユダヤ人に福音を伝える。
 - ②ユダヤ人が福音を拒否したなら、次に異邦人に向かう。

(3) パウロは、誰にも相談しなかった（福音が人間の作品ではないことの証明）。

①「血肉」とは、人間のことである。

②使徒たちと会うためにエルサレムに上ることはしなかった。

＊にもかかわらず、パウロの宣べ伝えた福音と、エルサレム教会の使徒たちが語っていた福音とは同じものであった。

(4) パウロは、すぐにアラビアに出て行った。

①アラビアとは、ヨルダン川の東岸地帯である。

②その地でヘブル語聖書を読んで黙想し、主イエスから直接教えを受けた。

③これが、パウロの福音が人間の作品ではないという弁明になっている。

(5) パウロは、再びダマスコに戻った。

①使徒 9：20～22 に書かれている宣教活動を行った。

結論

1. 胎内にあるときからの選び

2. 先祖の伝承

1. 胎内にあるときからの選び

(1) イザ 49：1～3

Isa 49:1 島々よ、私に聞け。／遠い国々の民よ、耳を傾けよ。／【主】は、生まれる前から私を召し、／母の胎内にいたときから私の名を呼ばれた。

Isa 49:2 主は私の口を鋭い剣のようにし、／御手の陰に私をかくまい、／私を研ぎ澄まされた矢とし、／主の矢筒の中に私を隠された。

Isa 49:3 そして、私に言われた。／「あなたはわたしのしもべ。イスラエルよ、／わたしはあなたのうちに、わたしの栄光を現す。」

①「第二のしもべの歌」と呼ばれている箇所

②「私」は、誰を指しているのか。

＊第一義的には、イスラエルの民を指している。

＊狭い意味では、「イスラエルの残れる者」である（イザヤも含まれる）。

＊究極的には、メシアであるイエスを指している。

③「しもべ」としての召しは、特権であり、十字架を負うことでもある。

④パウロも、同じ道を歩んでいる。

(2) エレ 1 : 4~5

Jer 1:4 次のような【主】のことばが私にあった。

Jer 1:5 「わたしは、あなたを胎内に形造る前から／あなたを知り、／あなたが母の胎を出る前からあなたを聖別し、／国々への預言者と定めていた。」

①エレミヤは、生まれる前から、異邦人への預言者として聖別されていた。

(3) パウロの自己認識

①自分は、旧約聖書の預言者の系譜につながる異邦人のための使徒である。

②自分は、「【主】のしもべ」の働きを継承する者である。

2. 先祖の伝承

(1) 「先祖の伝承」とは、口伝律法のことである。

①ユダヤ教は、神は成文法と口伝律法をイスラエルに与えたと主張する。

②しかし、口伝律法はモーセの律法の「垣根」として付加されたものである。

③食物規定や安息日の規定は、そのようにして生まれたものである。

④イエスとパリサイ人たちの論争は、口伝律法をめぐるものである。

⑤口伝律法を「ハラハー」と呼ぶ。

*ユダヤ法（Jewish law）とも呼ばれる。

⑥タルムードの大部分を占めているのはハラハーである。

*モーセの律法は、安息日を守れと命じている。

*タルムードは、どのように安息日を守るかを教えている。

(2) かつてパウロは、ユダヤ教に進んでおり、先祖の伝承に人一倍熱心であった。

①彼は、ユダヤ教の学びの最先端にいた。

②ユダヤ教は、常に「新しい律法」を付け加える作業をしている。

③パウロが新しい律法を作る神学委員のひとりであった可能性は高い。

(3) メシアニックジューの中には、「ハラハー」を重視する人が多い。

①多くのクリスチャンが、その影響を受けている。

②「ハラハー」に対するパウロの評価（ピリ 3 : 7~8）

Php 3:7 しかし私は、自分にとって得であったこのようなすべてのものを、キリストのゆえに損と思うようになりました。

Php 3:8a それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、私はすべてを損と思っています。私はキリストのゆえにすべてを失いましたが、それらはちりあくだと考えています。

ガラテヤ 4回
「神から啓示された福音（2）」
ガラ 1：18～24

1. はじめに

(1) ガラテヤ人への手紙の位置づけ

- ①パウロは、第1次伝道旅行でガラテヤ地方に複数の教会を設立した。
- ②パウロが設立した諸教会を、ユダヤ人信者の律法主義者が訪問した。
- ③ガラテヤの諸教会は、その影響を受けていた。
- ④パウロは、律法主義者の教えに反論する必要を感じ、この書簡を書いた。

(2) ガラテヤ人への手紙のアウトライン

- ①個人的弁明：パウロの使徒職（1：1～2：21）
- ②教理的教え：信仰義認（3：1～4：31）
- ③実践的教え：キリスト者の自由（5：1～6：18）

(3) ガラテヤ1～2章で、パウロは自分の履歴書を書いている。

- ①教会を迫害した時代のこと
 - *自分は、律法に熱心であった。
- ②ダマスコ途上での回心体験のこと
 - *福音をエルサレム教会から学んだのではない。
- ③回心体験後のこと
 - *アラビアに出て行った。
 - *ダマスコに戻った。
 - *その後、エルサレムに上った。
 - *3つの「それから」（Then）が、時間の区切りになっている。
 - ・ガラ1：18、21、2：1

(4) パウロが履歴書を書く理由は、誰から福音を学んだのかを示すためである。

- ①きょうの聖書箇所、ようやくエルサレム教会との交流が始まる。

2. メッセージのアウトライン

- (1) パウロの福音（11～12節）
- (2) 回心前の出来事（13～14節）
- (3) 回心時の出来事（15～17節）
- (4) 回心後の出来事（18～24節）

*前回は、(1)～(3)を取り上げた。

*今回は、(4)を取り上げる。

3. 結論：5つの質問

- (1) パウロは、いつ、誰によって使徒として召されたのか。
- (2) ガラテヤの諸教会にあった問題とは、何か。
- (3) パウロの福音と「ほかの福音」の違いは何か。
- (4) 「ほかの福音」を説く者の上に、どのような宣言が下されたか。
- (5) パウロは、誰から福音のメッセージを受けたのか。

神から啓示された福音について学ぶ。

IV. 回心後の出来事（18～24節）

1. 18節

Gal 1:18 それから三年後に、私はケファを訪ねてエルサレムに上り、彼のもとに十五日間滞在しました。

(1) ここで最初の「それから」が出て来る。

①それから「三年後」とは、ダマスコ体験から数えて3年後であろう。

②ユダヤ的視点では、1年を少し越えただけでも3年と見なされる。

③パウロの論点は何か。

*自分が伝えている福音は、使徒たちから教わったものではない。

*もし教わる必要があるなら、もっと早くエルサレムに上っていた。

④パウロと律法主義者たちの対比

*パウロの福音は、エルサレムの使徒たちから受けたものではない。

*律法主義者たちは、自分たちの権威は、エルサレム教会から与えられていると主張していた。

(2) 「私はケファを訪ねてエルサレムに上り」

①パウロが接触した最初の使徒は、ペテロである。

②ペテロの名前

*彼のヘブル名は、シメオンである（使 15:14）。

*イエスは彼を「ケファ」（岩）と呼んだ（ヨハ 1:42）。

*さらにイエスは彼を「ペテロ」（岩、石）と呼んだ（マタ 16:18）。

③アラム語の「ケファ」は、ユダヤ人信者には馴染みがある。

④パウロがペテロを訪問したのは、個人的な交わりのためである。

*ここでは、ペテロとパウロが対等な存在として描かれている。

⑤パウロは、たった15日間しかペテロのもとに滞在しなかった。

*福音の内容を学ぶには、短すぎる。

⑥その後、迫害を避けるために、パウロはエルサレムを去ることになった。

2. 19～20 節

Gal 1:19 しかし、主の兄弟ヤコブは別として、ほかの使徒たちにはだれにも会いませんでした。

Gal 1:20 神の御前で言いますが、私があなたがたに書いていることに偽りはありません。

(1) 「主の兄弟ヤコブ」

①ゼベダイの子ヤコブと区別するために「主の兄弟」という言葉が付いている。

*使徒たちの中で最初の殉教者となったヤコブは、当時まだ生きていた。

②主の兄弟ヤコブは、12使徒とは別の範疇の使徒であった。

*バルナバとパウロも、第2グループの使徒である。

③伝承では、ヤコブはエルサレム教会の初代監督となった。

*ヤコブは死ぬまでエルサレム教会の監督であった。

*彼が巡回伝道に出かけたという記録はない。

④パウロの訪問時、ほかの使徒たちは伝道旅行に出かけていたのであろう。

⑤ヤコブによる認定は、パウロが教会に受け入れられるための条件であった。

(2) パウロは、自分は偽りを語っていないと、神の前で宣言する。

①律法主義者の中に、パウロを疑う者たちがいた。

②パウロは、神を証人に呼んで、厳粛な誓いを立てている。

③ユダヤ人にとっては、これ以上厳粛な誓いはない。

④パウロは、自分が伝えている福音は、神からの啓示であると宣言している。

3. 21～22 節

Gal 1:21 それから、私はシリアおよびキリキアの地方に行きました。

Gal 1:22 それで私は、キリストにあるユダヤの諸教会には顔を知られることはありませんでした。

(1) 2番目の「それから」が出て来る。

①エルサレムのユダヤ人たちがパウロを殺そうとした（使9:29～30）。

②そこでパウロは、シリアとキリキアの地方に逃れた。

③その地方で長期に渡って伝道した。

④使徒たちとの協力があつたわけではなく、単独で宣教した。

(2) 「キリストにあるユダヤの諸教会」

①MJ運動は、ひとつの流れである。

②しかし、国中に、数々のMJコングリゲーションが広がっていた。

(3) パウロのエルサレム滞在は、短期間だった。

①パウロの顔は、ユダヤの諸教会に知られることはなかった。

②パウロの顔さえ知らないのだから、ユダヤの諸教会が彼を使徒に任命するのは不可能なことである。

4. 23～24節

Gal 1:23 ただ、人々は、「以前私たちを迫害した者が、そのとき滅ぼそうとした信仰を今は宣べ伝えている」と聞いて、

Gal 1:24 私のことで神をあがめていました。

(1) 人々は、かつての迫害者が伝道者になっていることに驚いた。

①パウロの回心は、神の奇跡である。

②人々は、神の御名をあがめた。

(2) 教会に対する迫害は、次第に激しくなりつつあった。

①パウロの回心は、人々に励ましを与えたことであろう。

②神は、パウロのような者でさえも変えることができるという驚きがある。

(3) 変えられた人生は、神の栄光の表れとなる。

①人類の歴史上、パウロのように変化した人は、稀である。

②私たちの人生は、どうか。

＊「あなた、変わったね」と言われるとき、神の栄光が現れている。

＊「クリスチャンだから、これができるね」と言われるとき、神の栄光が現れている。

結論：5つの質問

1. パウロは、いつ、誰によって使徒として召されたのか。

(1) 母の胎にあるときから、神はパウロを選んでおられた。

(2) 「胎内にあるときからの選び」は、旧約聖書に出て来る概念である。

(3) パウロの使命は、異邦人に福音を伝えることである。

2. ガラテヤの諸教会にあった問題とは、何か。

(1) 偽教師たち（ユダヤ主義者）が来て、誤った教理を伝えていた。

- (2) 彼らは、ユダヤ人信者で、ユダヤ教の律法主義を推奨する人たちである。
- (3) 彼らは、律法を守ることが救いと聖めのための条件であると教えていた。
- (4) 多くの信者たちが、その教えの影響を受けていた。

3. パウロの福音と「ほかの福音」の違いは何か。

- (1) 「ほかの福音」とは、質的に異なる福音で、実際には「福音」ではない。
- (2) パウロの福音は、神の啓示によって与えられた。
 - ①人は、恵みと信仰によって義とされる。
 - ②イエス・キリストの贖いの御業を正しく評価した福音である。
- (3) 「ほかの福音」は、人間が考えた教えである。
 - ①律法を行うことによって義とされる。
 - ②人間のプライドをくすぐる教えである。

4. 「ほかの福音」を説く者の上に、どのような宣言が下されたか。

- (1) パウロは、偽教師たちに対して永遠の呪いを宣言した。
- (2) ギリシア語で「アナテマ」である。
- (3) 自分自身や天使まで引き合いに出して、「アナテマ」を宣言した。
 - ①これは、「アナテマ」の厳粛さを示すための表現である。
- (4) 旧約聖書にも、偽預言者への呪いの宣言が出て来る（申 18：20）。

5. パウロは、誰から福音のメッセージを受けたのか。

- (1) ガラ 1：12

Gal 1:12 私はそれを人間から受けたのではなく、また教えられたのでもありません。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。

- (2) パウロの福音は、人間から受けたものでも、教えられたものでもない。
- (3) パウロの福音は、イエス・キリストの啓示によって与えられたものである。
- (4) その内容は、キリストの死、埋葬、復活である（1コリ 15：3～5）。

1Co 15:3 私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書に書いてあるとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、

1Co 15:4 また、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりに、三日目によみがえられたこと、

1Co 15:5 また、ケファに現れ、それから十二弟子に現れたことです。

- (5) パウロに独特な教えは、「位置的真理」（In Christ）である。
- (6) 異なった教えに対して寛容であることは、許されない。

ガラテヤ 5回

「使徒たちの承認ーキリストにある自由ー」

ガラ 2：1～10

1. はじめに

(1) ガラテヤ人への手紙の位置づけ

- ①パウロは、第1次伝道旅行でガラテヤ地方に複数の教会を設立した。
- ②パウロが設立した諸教会を、ユダヤ人信者の律法主義者が訪問した。
- ③ガラテヤの諸教会は、その影響を受けていた。
- ④パウロは、律法主義者の教えに反論する必要を感じ、この書簡を書いた。

(2) ガラテヤ人への手紙のアウトライン

- ①個人的弁明：パウロの使徒職（1：1～2：21）
- ②教理的教え：信仰義認（3：1～4：31）
- ③実践的教え：キリスト者の自由（5：1～6：18）

(3) パウロは、自分の履歴書を書いている。

- ①教会を迫害した時代
 - *自分は、律法に熱心であった。
- ②ダマスコ途上での回心体験
 - *福音をエルサレム教会から学んだのではない。
- ③回心体験後
 - *ダマスコからアラビアに出て行った。
 - *アラビアからダマスコに戻った。
 - *その後、エルサレムに上った。

(4) 履歴書を書く理由は、福音を神から直接学んだことを示すためである。

- ①ガラ 2：1は、極めて重要な聖句である。

Gal 2:1 それから十四年たって、私はバルナバと一緒に、テトスも連れて、再びエルサレムに上りました。

- ②パウロの福音が、使徒たちの理解と同じかどうか焦点となっている。

2. メッセージのアウトライン

- (1) バルナバとテトスが同行（1～2節）
- (2) 割礼問題（3～6節）
- (3) ヤコブとケファとヨハネが承認（7～10節）

3. 結論

- (1) テトスという人物
- (2) 今日の適用

使徒たちによる承認について学ぶ。

I. バルナバとテトスが同行（1～2 節）

1. 1 節

Gal 2:1 それから十四年たって、私はバルナバと一緒に、テトスも連れて、再びエルサレムに上りました。

(1) 使徒の働きには、パウロのエルサレム訪問が 5 回出て来る。

- ①ダマスコを出た後の訪問（使 9：26～30、ガラ 1：18～20）
- ②救援の物を届けるための訪問（使 11：27～30）
- ③エルサレム会議に出席するための訪問（使 15：1～30）
- ④第二次伝道旅行の締めくくりとしての訪問（使 18：22）
- ⑤投獄につながった最後の訪問（使 21：15～23：35）

＊②か③であるが、断定は難しい。

＊ここでは、③を採用する。

(2) 「それから 14 年たって」

- ①14 年間、エルサレム教会との交流はなかった。
- ②バルナバと一緒にいった。彼は、ユダヤ人信者である。
＊バルナバは、ガラテヤの諸教会にはよく知られていた。
- ④テトスも同行した。彼は、異邦人信者である。
＊テトスは、エルサレム教会の信仰を問う試金石である。
＊つまり、彼が割礼を強いられるかどうかという問題である。

2. 2 節

Gal 2:2 私は啓示によって上ったのです。そして、私が今走っていること、また今まで走ってきたことが無駄にならないように、異邦人の間で私が伝えている福音を人々に示しました。おもだった人たちには個人的にそうしました。

(1) パウロは、啓示によってエルサレムに上った。

- ①エルサレム教会の指導者たちに命令されたからではない。
- ②パウロは、14 年間も異邦人伝道を行っていた（タルソ近辺）。
- ③この訪問は、これまでの働きが無駄にならないようにする好機である。

(2) 最初に私的な会合があった（2～3節）。

- ①パウロは、教会の指導者であったヤコブ、ペテロ、ヨハネと会った。
- ②公の会合の前に、彼らの同意を得ておくことは重要な準備であった。
- ③使徒たちの同意がないなら、異邦人伝道の将来が危ぶまれる。
- ④パウロは、自分が異邦人の間で伝えている福音の内容を説明した。
- ⑤パウロは、使徒たちの承認を必要としたわけではない。
*福音の内容が合致しているかどうか、重要である。
- ⑥いっしょにいたテトスは割礼を強いられなかった。

(3) 次に公の会合（エルサレム会議）が開かれた（4～5節）。

- ①使徒15章に出て来る。
- ②その会合には、「忍び込んだ偽兄弟たち」が参加していた。
- ③「忍び込む」とは、スパイのように探りを入れること（軍隊用語）。

II. 割礼問題（3～6節）

1. 3～4節

Gal 2:3 しかし、私と一緒にいたテトスでさえ、ギリシア人であったのに、割礼を強いら
れませんでした。

Gal 2:4 忍び込んだ偽兄弟たちがいたのに、強えられるということはありませんでした。
彼らは私たちを奴隷にしようとして、キリスト・イエスにあって私たちが持っている自由
を狙って、忍び込んでいたのです。

(1) テトスを連れて来たのは、使徒たちの福音理解を確認するためである。

- ①テトスは、無割礼の異邦人信者である。
- ②パウロの福音によれば、ユダヤ人も異邦人も、恵みと信仰によって救われる。
- ③もしテトスに割礼を受けさせるべきだという声が上がれば、大問題である。
*使徒たちの福音理解は、ユダヤ主義者と同じだということになる。

(2) テトスは、割礼を強いられなかった。

- ①彼は、ギリシア人である。つまり、異邦人である。
- ②割礼を強いられなかったのは、使徒たちが同じ福音理解を持っていたから。
- ③使徒たちの教えは、律法主義者の教えとは異なる。

(3) 「忍び込んだ偽兄弟たち」

- ①しかし、テトスに割礼を受けさせようとする圧力はあった。

- ②偽兄弟たちとは、律法主義者たちである。
- ③彼らは、教会の中に忍び込んでいた。
- ④彼らは、信者を奴隷にしようとしていた。
 - *モーセの律法と口伝律法の奴隷
- ⑤彼らは、キリスト・イエスにあって信者が持っている自由を狙っていた。
 - *信者は、聖霊に導かれて自由に主を礼拝することができる。

3. 5節

Gal 2:5 私たちは、一時も彼らに譲歩したり屈服したりすることはありませんでした。それは、福音の真理があなたがたのもとで保たれるためでした。

- (1) パウロとバルナバは、一切の譲歩を拒否した。
 - ①テトスに割礼を受けさせなかった。
 - ②福音の真理が攻撃されているからである。
 - ③福音を信じた上で、律法を行う必要があるなら、それは福音ではなくなる。
- (2) 「それは、福音の真理があなたがたのもとで保たれるためでした」
 - ①福音の真理を堅持するのは、ガラテヤの信者たちのためである。
 - ②またそれは、代々にわたって救われる聖徒たちのためである。
 - *この書簡の宗教改革への影響を見よ。

4. 6節

Gal 2:6 そして、おもだった人たちからは——彼らがどれほどの者であっても、私にとって問題ではありません。神は人を分け隔てなさいません——そのおもだった人たちは、私に対して何もつけ加えはしませんでした。

- (1) エルサレム教会のリーダーたちは、パウロの福音が完璧であることを認めた。
 - ①過去14年間、パウロは単独で伝道して来た。
 - ②今初めて福音の内容を分かち合ったところ、すべてにおいて合致していた。
 - ③これは、驚くべきことである。
- (2) パウロは、リーダーたちを過小評価しているわけではない。
 - ①パウロは、人を地位や外面で評価しない。
 - ②神は、人を分け隔てたりするお方ではない。

Ⅲ. ヤコブとケファとヨハネが承認（7～10節）

1. 7～8節

Gal 2:7 それどころか、ペテロが割礼を受けている者への福音を委ねられているように、私は割礼を受けていない者への福音を委ねられていることを理解してくれました。

Gal 2:8 ペテロに働きかけて、割礼を受けている者への使徒とされた方が、私にも働きかけて、異邦人への使徒としてくださったからでした。

(1) エルサレム教会のリーダーたちが示した理解

- ①ペテロは、ユダヤ人伝道に召されている。
- ②パウロは、異邦人伝道に召されている。

(2) ペテロもパウロも、同じ神から召命を受けている。

- ①ペテロとパウロは、同じ福音を 2 つの異なったグループに伝えた。
- ②それゆえ、ペテロとパウロは対等である。

2. 9 節

Gal 2:9 そして、私に与えられたこの恵みを認め、柱として重んじられているヤコブとケファとヨハネが、私とバルナバに、交わりのしるしとして右手を差し出しました。それは、私たちが異邦人のところに行き、彼らが割礼を受けている人々のところに行くためでした。

(1) ヤコブとケファ（ペテロ）とヨハネが、上記の理解を承認した。

- ①ヤコブとは、主イエスの肉の兄弟ヤコブである。
- ②この 3 人は、エルサレム教会の 3 本柱であった。
- ③右手を差し出したのは、友情と承認のしるしとなる行為である。

(2) エルサレム教会の使徒たちとパウロの一行は、競争相手ではない。

- ①教会形成のために、異なった場所で働く同労者である。
- ②彼らの姿勢から、学ぶべき教訓は多い。

3. 10 節

Gal 2:10 ただ、私たちが貧しい人たちのことを心に留めるようにとのことでしたが、そのことなら私も大いに努めてきました。

(1) 唯一の要請は、貧しい人たちへの配慮であった。

- ①エルサレム教会は、貧困問題を抱えていた。
 - *信者の数が増えていた。
 - *信者が職に就くのは容易ではなかった。
 - *当初は持ち物を売ってそれを分かち合っていたが、長続きしなかった。
- ②パウロは、すでに貧しい人たちへの配慮を実行していた。

(2) パウロの慈善的行為

- ①アンテオケ教会から援助の物を持って来た。
- ②第三次伝道旅行の際に、異邦人教会からの献金をエルサレム教会に届けた。
- ③異邦人信者がユダヤ人信者を助けることは、両者の一致と愛を促進する。
- ④異邦人信者とユダヤ人信者の調和は、異端的教えから教会を守る力となる。

結論：

1. テトスという人物

- (1) 異邦人信者である。
 - ①聖霊に満たされた信頼できる信者である。
 - ②当時、アンテオケに住んでいた。
- (2) パウロの代理人として、コリント教会に行った。
- (3) パウロの代理人として、エルサレム教会に行った。
- (4) パウロの代理人として、クレタの教会を牧した。
- (5) 人格的に信頼できる、特に、金銭管理において信頼できる人である。

2. 今日の適用

- (1) モーセの律法が与えられて以降、それに従うのがユダヤ人の義務であった。
 - ①旧約時代においては、異邦人はユダヤ教に改宗して律法に従わなければ、ユダヤ人に与えられた祝福と特権に与ることができなかった。
 - (2) イエスの死と復活により、その状況が一変した。
 - ①恵みの時代が到来した。
 - ②イエスを信じる者は、律法から解放された。
 - ③しかし、ユダヤ人信者は、この変化を受け入れることに困難を覚えた。
 - (3) 律法主義者たちは、こう主張した。
 - ①異邦人は、先ずユダヤ教に改宗してから、信仰によって救われる。
 - ②救いと聖化のために、律法を行う必要がある。
 - (4) 今日の議論は、これとは逆になっている。
 - ①ユダヤ人は、ユダヤ人であることを止めなくても信仰によって救われる。
 - (5) ユダヤ人信者には、律法を守る自由も、守らない自由もある。
 - (6) ユダヤ人信者の中には、ユダヤ人も異邦人も律法を守るべきだと主張する人たちがいる。
 - ①これは間違った教えである。
 - ②キリストにある自由を渡してはならない。
- (ILL) パトリック・ヘンリー 1775年3月23日の演説
- ①イギリスの支配に異議を唱える演説。
 - ②演説の結びは、「私に自由を与えよ。然らずんば死を与えよ」

ガラテヤ 6 回
「ペテロの偽善」 ガラ 2：11～21

1. はじめに

(1) ガラテヤ人への手紙のアウトライン

- ①個人的弁明：パウロの使徒職（1：1～2：21）
- ②教理的教え：信仰義認（3：1～4：31）
- ③実践的教え：キリスト者の自由（5：1～6：18）

(2) 文脈の確認

- ①パウロは、ガラテヤの信者たちが「ほかの福音」に移っていくことに驚いた。
- ②「ほかの福音」を伝える者は、呪われるべきである。
- ③パウロの福音は、神からの啓示によって与えられたものである。
- ④パウロの福音理解は、使徒たちのそれと一致していた。

2. メッセージのアウトライン

- (1) 律法主義者を恐れるペテロ（11～13 節）
- (2) ペテロを戒めるパウロ（14 節）
- (3) 信仰義認を主張するパウロ（15～21 節）

3. 結論

- (1) ペテロの貢献
- (2) ペテロの失敗
- (3) 私たちへの教訓

ペテロの偽善的行為について学ぶ。

I. 律法主義者を恐れるペテロ（11～13 節）

1. 11 節

Gal 2:11 ところが、ケファがアンティオキアに来たとき、彼に非難すべきことがあったので、私は面と向かって抗議しました。

- (1) これは、パウロの履歴書に記された歴史的出来事の最後のものである。
 - ①福音を守るために、パウロは、使徒のリーダーであるペテロを非難した。
 - ②これは、パウロの使徒職を証明するためのエピソードでもある。

- (2) 前回取り上げた箇所でのペテロと、ここでのペテロは、劇的に異なる。

①パウロがエルサレムを訪問した際、ペテロは友好の右手を差し出した。

②ガラ 2 : 9

Gal 2:9 そして、私に与えられたこの恵みを認め、柱として重んじられているヤコブとケファとヨハネが、私とバルナバに、交わりのしるしとして右手を差し出しました。それは、私たちが異邦人のところに行き、彼らが割礼を受けている人々のところに行くためでした。

(3) ペテロがアンティオキアの教会を訪問した。

①「ケファ」というヘブル名が使用されている。

②使徒の働きの中には、この訪問は記されていない。

③恐らく、パウロ、バルナバ、テトスがエルサレムから戻った直後であろう。

④ペテロが偽善的行為を行ったので、パウロは面と向かって抗議した。

⑤パウロは、ペテロと同じ権威を委ねられた使徒として行動している。

*パウロは、12使徒からは独立した、対等な立場に立つ使徒である。

2. 12 節

Gal 2:12 ケファは、ある人たちがヤコブのところから来る前は、異邦人と一緒に食事をしていたのに、その人たちが来ると、割礼派の人々を恐れて異邦人から身を引き、離れて行ったからです。

(1) アンティオキアの教会には、ユダヤ人信者と異邦人信者がいた。

①彼らは、ユダヤ教の食物規定に囚われず、食事をともにしていた。

②ペテロは、皮なめしシモンの家で幻を見たことがあった（使 10 : 9～16）。

*「神がきよめた物を、あなたがきよくないと言ってはならない」

③ペテロには、異邦人信者と食事をともにすることへの抵抗感はなかった。

④これは、ユダヤ人と異邦人のキリストにある一致を示す美しい光景だった。

⑤また、ユダヤ人も異邦人も、律法から解放されたことを示す光景だった。

(2) しかし、あることが原因で、ペテロは異邦人から離れ行った。

①「ある人たちがヤコブのところから来る」

②パウロは彼らのことを「兄弟たち」とは呼んでいない。

③彼らは、エルサレムから下って来た律法主義者たちである。

④彼らは、ヤコブの承認を得ていたわけではない。

(3) 「割礼派の人々を恐れて異邦人から身を引き、離れて行った」

①ペテロの神学が変わったわけではない。

②彼は、恐れゆえに異邦人信者と一緒に食事をしなくなったのである。

③使 11 : 18 で見られたペテロの姿とは、大いに異なる。

Act 11:18 人々はこれを聞いて沈黙した。そして「それでは神は、いのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになったのだ」と言って、神をほめたたえた。

3. 13 節

Gal 2:13 そして、ほかのユダヤ人たちも彼と一緒に本心を偽った行動をとり、バルナバまで、その偽りの行動に引き込まれてしまいました。

- (1) ペテロの欺瞞的行為が、他の人たちに悪影響を与えた。
 - ①ほかのユダヤ人信者も、異邦人信者から離れて行った。
 - ②ついに、バルナバまでその偽りの行動に引き込まれてしまった。
 - ③バルナバはパウロの同労者であったので、パウロにとっては衝撃であった。
 - ④恐らく、聖餐式が2つ（ユダヤ人信者向けと、異邦人信者向け）別々に行われるようになったのであろう。
 - ⑤今日でも、正統派のユダヤ人は異邦人とは食事をともにしない。
* 異邦人と同じ器を使うと、儀式的な汚れを受けると考えている。

(2) ペテロやバルナバは、ユダヤ人と異邦人はキリストにあって一つであると教えていた。

- ①ところが、実践においては、これを否定するような行動を取った。
- ②教えていることと行いが一致していないことを、偽善という。

II. ペテロを戒めるパウロ（14 節）

1. 14 節

Gal 2:14 彼らが福音の真理に向かってまっすぐに歩んでいないのを見て、私は皆の面前でケファにこう言いました。「あなた自身、ユダヤ人でありながら、ユダヤ人ではなく異邦人のように生活しているのならば、どうして異邦人に、ユダヤ人のように生活することを強いるのですか。」

- (1) パウロはみなの前（公の場）で、ペテロの過ちを指摘した。
 - ①福音の真理が曲げられるのを恐れたからである。
 - ②ペテロの欺瞞的行為は公の場で行われたので、叱責も公に行われる。
- (2) パウロの論理は、以下のようなものである。
 - ①自分たちユダヤ人は、律法によっては救われないということを知った。
 - ②自分たちは、イエス・キリストを信じて救われた。
 - ③異邦人も同じように信仰によって救われた。
 - ④なぜ、異邦人信者にユダヤ人のように生活することを強いるのか。

- (3) ペテロがどう応答したかは、書かれていない。
- ①その偽善の重大さのゆえに、大いに恥を被ったであろう。
 - ②パウロの叱責のことばが 14 節で終わったかどうかを判定するのは難しい。
*パウロは、もっと多くのことを語ったはずである。
 - ③とりあえず、15 節以降はパウロによる神学的考察と考えておこう。
*15～21 節は、ガラテヤ 3～4 章へのブリッジとなる。
*ガラテヤ 3～4 章の主要なテーマは、「信仰義認」である。

Ⅲ. 信仰義認を主張するパウロ（15～21 節）

1. 15 節

Gal 2:15 私たちは、生まれながらのユダヤ人であって、「異邦人のような罪人」ではありません。

- (1) パウロは、ユダヤ人の同胞を意識しながら書いている。
- ①パウロ、ペテロ、バルナバ、その他のユダヤ人信者が含まれる。
- (2) 「私たちは、…『異邦人のような罪人』ではありません」
- ①パウロがそう考えていたということではない。
*この言葉は、パウロ独特の皮肉（アイロニー）である。
 - ②ユダヤ人一般は、異邦人を罪人と見なし、彼らに対して優越感を持っていた。
 - ③ペテロの欺瞞的な行為は、ユダヤ人の優越感の現われである。
 - ④その私たちユダヤ人でさえも、律法ではなく信仰によって救われた。
 - ⑤それゆえ、異邦人に律法を押しつけてもなんの意味もない。

2. 16 節

Gal 2:16 しかし、人は律法を行うことによってではなく、ただイエス・キリストを信じることによって義と認められると知って、私たちもキリスト・イエスを信じました。律法を行うことによってではなく、キリストを信じることによって義と認められるためです。というのは、肉なる者はだれも、律法を行うことによっては義と認められないからです。

- (1) 「義と認められる」
- ①ガラテヤ書で最も重要な言葉は、「ディカイオオウ」（義とされる）である。
 - ②その言葉が、ここで初めて登場する。
 - ③これは法律用語である。法廷で「義と宣言される」という意味である。
- (2) 義とされる方法（not A but B）

- ①否定的宣言—律法を行うことによってではない。
- ②肯定的宣言—イエス・キリストを信じる信仰による。

(3) 「私たちもキリスト・イエスを信じました」

- ①私たちの中に、パウロもペテロもバルナバも含まれる。
- ②パウロとペテロとバルナバの福音理解は、同じはずである。

3. 17～18 節

Gal 2:17 しかし、もし、私たちがキリストにあって義と認められようとするので、私たち自身も「罪人」であることになるのなら、キリストは罪に仕える者なのですか。決してそんなことはありません。

Gal 2:18 もし自分が打ち壊したものを再び建てるなら、私は自分が違反者であると証明することになるのです。

- (1) ここでパウロは、「キリスト論的アプローチ」を取っている。
 - ①もし律法を行わないことが罪なら、キリストを信じた人は、律法を行わなくなるので、「罪人」となる。
 - ②それなら、キリストは罪の助成者となるが、それはあり得ない。
- (2) ペテロの欺瞞的行為は、自分自身を違反者にするものである。
 - ①自分は律法に違反していたことを認めることになる。

5. 19～20 節

Gal 2:19 しかし私は、神に生きるために、律法によって律法に死にました。私はキリストとともに十字架につけられました。

Gal 2:20 もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです。

- (1) キリストを信じた者の体験を「死と復活」というキーワードを基に解説する。
 - ①信者の体験は、信仰によってキリストの死と復活につながるということ。
 - ②同じことが 2 度繰り返されているのは、ヘブライ的対句法を思わせる。
- (2) 死の体験
 - ①「神に生きるために、律法によって律法に死にました」
 - * 律法は、律法に違反した者の死刑を要求する。
 - ②「私はキリストとともに十字架につけられました」
 - * キリストは、十字架の上で罪の代価を払ってくださった。

(3) 復活の体験

- ①「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです」
- ②「今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです」

6. 21 節

Gal 2:21 私は神の恵みを無にはしません。もし義が律法によって得られるとしたら、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます。

- (1) 「私は神の恵みを無にはしません」は、ペテロとの対比を考えたものである。
 - ①恵みとは、受けるに値しない者に注がれ神の祝福である。
 - ②ペテロの欺瞞的行為は、神の恵みを排除したものである。
 - ③義が律法によって得られるなら、キリストの死は無意味なものになる。

結論：

1. ペテロの貢献

- (1) ペテロは、12 使徒のスポークスマンであった。

①使 2 : 14

Act 2:14 ペテロは十一人とともに立って、声を張り上げ、人々に語りかけた。「ユダヤの皆さん、ならびにエルサレムに住むすべての皆さん、あなたがたにこのことを知っていたきたい。私のことばに耳を傾けていただきたい。」

- (2) ペテロは、教会誕生の立役者であった。

①使 2 : 41

Act 2:41 彼のことばを受け入れた人々はバプテスマを受けた。その日、三千人ほどが仲間に加えられた。

- (3) ペテロは、ユダヤ人、サマリア人、異邦人のために御国の扉を開いた。

①使 2 章、8 章、10 章

2. ペテロの失敗

- (1) ペテロは、十字架の預言を否定した。

①マタ 16 : 22

Mat 16:22 すると、ペテロはイエスをわきにお連れして、いさめ始めた。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあなたに起こるはずがありません。」

(2) ペテロは、イエスを知らないと言った。

①マタ 26 : 69～70

Mat 26:69 ペテロは外の中庭に座っていた。すると召使いの女が一人近づいて来て言った。「あなたもガリラヤ人イエスと一緒にいましたね。」

Mat 26:70 ペテロは皆の前で否定し、「何を言っているのか、私には分からない」と言った。

(3) ペテロは、アンティオキアの教会で、律法主義者を恐れた。

①ペテロには、圧力がかかると妥協するという癖があった。

3. 私たちへの教訓

(1) 神は、不完全な器を用いてご自身の計画をお進めになる。

①人間の失敗は、神の計画を無効にするものではない。

(2) 使徒たちは、神の靈感によって啓示の書を記している間だけ、間違いを犯すことから守られている。

①それ以外の時は、間違いを犯す可能性がある。

(3) 指導者に対する姿勢

①尊敬の念を持って接する。

②間違いを犯す可能性もあることを、心に覚える。

③すべての判断を、聖書に基づいて行う。

ガラテヤ 7回

ガラ 3：1～5 「信仰体験に基づく議論」

1. はじめに

(1) ガラテヤ人への手紙の位置づけ

- ①ガラテヤ地方の諸教会は、律法主義者の教えの影響を受けた。
- ②パウロは、律法主義者の教えに反論する必要を感じ、この書簡を書いた。

(2) ガラテヤ人への手紙のアウトライン

- ①個人的弁明：パウロの使徒職（1：1～2：21）
- ②教理的教え：信仰義認（3：1～4：31）
- ③実践的教え：キリスト者の自由（5：1～6：18）

(3) 文脈の確認

- ①1章と2章で、使徒職と福音は、神からのものであることが証明された。
- ②3章から、ガラテヤ人たちに対する教理的教えが始まる。

*信仰体験に基づく議論（1～5節）

*聖書に基づく議論（6～14節）

*論理に基づく議論（15～29節）

- ③今回は、信仰体験に基づく議論（1～5節）を取り上げる。

*パウロは、4つの質問をするが、すべて、修辭的質問である。

*答を求めるのではなく、考えさせ、内省させるための質問である。

2. メッセージのアウトライン

- (1) 偽教師による惑わし（1節）
- (2) 第1の質問（2節）
- (3) 第2の質問（3節）
- (4) 第3の質問（4節）
- (5) 第4の質問（5節）

3. 結論

- (1) 偽教師の背後に潜む悪魔
- (2) 人間の心に宿る欲望
- (3) 聖霊がもたらす救い

ガラテヤ人の信仰体験について学ぶ。

I. 偽教師による惑わし（1 節）

Gal 3:1 ああ、愚かなガラテヤ人。十字架につけられたイエス・キリストが、目の前に描き出されたというのに、だれがあなたがたを惑わしたのですか。

(1) ここから、より改まった形の議論入る。

①「私は驚いています」（1：6）

②ここでは、「ああ、愚かなガラテヤ人」と言っている。

＊パウロの叱責は、直接的である。

③「愚か」（アノエイトス）とは、知識に欠けるということではなく、判断力がない、知恵がない、ということである。

④当時の哲学者たちは、ガラテヤ地方の人々は知識が豊富だと認めていた。

⑤イエスも同じ言葉を語られた（ルカ 24：25）

Luk 24:25 そこでイエスは彼らに言われた。「ああ、愚かな者たち。心が鈍くて、預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち。

⑤パウロは、ロマ 1：14 で同じ言葉を使っている。

＊アノエイトスは、「知識のない人」「知恵のない人」である。

Rom 1:14 私は、ギリシア人にも未開の人にも、知識のある人にも知識のない人にも、負い目のある者です。（新改訳 2017）

Rom 1:14 わたしは、ギリシア人にも未開の人にも、知恵のある人にもない人にも、果たすべき責任があります。（新共同訳）

(2) 「だれがあなたがたを惑わしたのですか」

①律法主義者の教えを受け入れるとはどうしたことか、という意味である。

②「惑わした」とは、まじないをかけられた状態、騙された状態である。

＊（文語訳）では、「誰が汝らを誑(たぶら)かししぞ」となっている。

③まじないをかけられているので、理性的な判断ができなくなっている。

＊実際に、異端の影響を受けた人を助け出すのは、容易なことではない。

＊マインドコントロール：強制に気づかせないで、他者を操作すること。

④彼らを惑わしたのは、律法主義者たちである。

(3) 「十字架につけられたイエス・キリストが、目の前に描き出されたというのに、」

①惑わされたガラテヤ人たちにも、大いに責任がある。

②パウロは、ガラテヤでの伝道において、イエス・キリストが人類の罪のために死んで復活したことを明確に伝えた。

③「目の前に描き出された」（プログラフィウ）とは、キリストの姿が、掲示板に書かれた公の宣言のようになったという意味である。

- ④キリストの贖罪死が福音の中心であることは、疑いようがない。
*十字架こそが、キリスト教の中心である。
- ⑤それにもかかわらず、ガラテヤ人の目は、キリストから律法に向けられた。
- ⑥それゆえ、彼らに弁解の余地はない。
- ⑦彼らを正気に戻すために、さらに4つの質問をする。

Ⅱ. 第1の質問(2節)

Gal 3:2 これだけは、あなたがたに聞いておきたい。あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行ったからですか。それとも信仰をもって聞いたからですか。

- (1) 聖霊を受けたのは、律法を行ったからか、信じたからか。
 - ①「これだけは、あなたがたに聞いておきたい」
 - *「あなたがたに一つだけ確かめたい」(新共同訳)
 - *この点が明らかになれば、すべての問題は解決する。
 - ②回心体験の時点まで遡り、何が起こったかを確かめようということである。

(2) 「あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行ったからですか。それとも信仰をもって聞いたからですか」

- ①これは、相手に考えさせるための修辭的質問である。
- ②パウロは、ガラテヤの信者たちが救われていることを疑っていない。
- ③福音を信じたときに、彼らは救われ、御霊を受けた。
- ④そのことを前提に、御霊を受けたのは、どうしてかと質問している。
- ⑤当然、律法を行ったからではなく、信仰をもって聞いたからである。
- ⑥ガラテヤの諸教会は、基本的には異邦人教会であり、そもそもモーセの律法とは無関係であった。
- ⑦異邦人でもユダヤ人でも、律法によって御霊を受けた人は、ひとりもない。
- ⑧信じた人は全員、恵みによって御霊を受けたのである。
- ⑨使 13:49~52 (ピシディアのアンティオキア)

Act 13:49 こうして主のことばは、この地方全体に広まった。

Act 13:50ところが、ユダヤ人たちは、神を敬う貴婦人たちや町のおもだった人たちを扇動して、パウロとバルナバを迫害させ、二人をその地方から追い出した。

Act 13:51二人は彼らに対して足のちりを払い落として、イコニオンに行った。

Act 13:52弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。

Ⅲ. 第2の質問(3節)

Gal 3:3 あなたがたはそんなにも愚かなのですか。御霊によって始まったあなたがたが、今、肉によって完成されるというのですか。

- (1) 神はどのような方法であなたがたを聖化へと導いておられるのか。
 - ①この質問は、信仰によって御霊を受けたということを前提としたもの。
 - ②彼らは、御霊の働きによって福音を信じることができた。
 - ③また、福音を信じた結果、御霊を受けた。
 - ④このようにして、恵みによって信仰生活が始まった。
- (2) それなのに、恵み以外の原則で聖化が進むと思うのは、愚かなことである。
 - ①「愚か」は、1節の「愚かなガラテヤ人」と同じ言葉である(アノエイトス)。
 - ②恵みの原則と律法の原則は、相反する概念である。
 - ③義認も聖化も、恵みによって与えられる。

IV. 第3の質問(4節)

Gal 3:4 あれほどの経験をしたのは、無駄だったのでしょうか。まさか、無駄だったということはないでしょう。

- (1) あなたがたの経験は、無駄だったのか。
 - ①「あれほどの経験をしたのは、」
 - *「斯程(かほど)まで多くの苦難(くるしみ)を受けしことは」(文語訳)
 - ②これは、パウロとバルナバ、また信者になった者たちが経験した迫害である。
 - ③使 14:21~22

Act 14:21 二人はこの町で福音を宣べ伝え、多くの人々を弟子としてから、リステラ、イコニオン、アンティオキアへと引き返して、

Act 14:22 弟子たちの心を強め、信仰にしっかりとどまるように勧めて、「私たちは、神の国に入るために、多くの苦しみを経なければならない」と語った。

- (2) 「無駄だったのでしょうか」
 - ①信仰により、恵みによって救われた結果、迫害に遭った。
 - *迫害したのは、律法に熱心なユダヤ人たちであった。
 - *もし律法を守っていたなら、迫害に遭わなかった。
 - ②律法による聖化を求めることは、かつて自分たちを迫害したユダヤ人たちが正しかったと認めることである。
 - ③もしそうなら、迫害に遭ったことは無意味だったことになる。
 - ④まさか、迫害の体験が無駄だったということはないだろう。

V. 第4の質問(5節)

Gal 3:5 あなたがたに御霊を与え、あなたがたの間で力あるわざを行われる方は、あなたがたが律法を行ったから、そうなるのでしょうか。

それとも信仰をもって聞いたから、そうなるのでしょうか。

(1) あなたがたが目撃した奇跡の原因は何か。

①使 14 : 3 (イコニオン)

Act 14:3 それでも、二人は長く滞在し、主によって大胆に語った。主は彼らの手によってしるしと不思議を行わせ、その恵みのことばを証しされた。

②使 14 : 8～10 (リステラ)

Act 14:8 さてリステラで、足の不自由な人が座っていた。彼は生まれつき足が動かず、これまで一度も歩いたことがなかった。

Act 14:9 彼はパウロの話すことに耳を傾けていた。パウロは彼をじっと見つめ、癒やされるにふさわしい信仰があるのを見て、

Act 14:10 大声で「自分の足で、まっすぐに立ちなさい」と言った。すると彼は飛び上がり、歩き出した。

(2) 御霊が与えられたり、奇跡が行われたりするのには、人間の業に対する神からの報いなのか。

①ガラテヤの信者たちは、そもそもモーセの律法を知らなかった。

②それらの御業は、福音を信じたことに対する神からの祝福である。

③ガラテヤの信者たちは、自らの体験を基に、義認と聖化は、恵みと信仰を通して与えられるということを確認できたはずである。

結論：

1. 偽教師の背後に潜む悪魔

(1) ガラ 3 : 1

Gal 3:1 ああ、愚かなガラテヤ人。十字架につけられたイエス・キリストが、目の前に描き出されたというのに、だれがあなたがたを惑わしたのですか。

(2) ここでの「だれが」は、単数形である。

(3) パウロは、律法主義者の教えの背後に悪魔を見たのであろう。

(4) ヨハ 8 : 44 (表面的な信仰しかないユダヤ人たちに向かって)

Joh 8:44 あなたがたは、悪魔である父から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと思っています。悪魔は初めから人殺しで、真理に立っていません。彼のうちには真理がないからです。悪魔は、偽りを言うとき、自分の本性から話します。なぜなら彼は偽り者、また偽りの父だからです。

2. 人間の心に宿る欲望

(1) 創 3 : 4～5

Gen 3:4 すると、蛇は女に言った。「あなたがたは決して死にません。

Gen 3:5 それを食べるそのとき、目が開かれて、あなたがたが神のようになって善悪を知る者となることを、神は知っているのです。」

①人間は、ナンバーワンになりたい、神のようになりたいと願っている。

②悪魔はそこに隙を見出し、人間を誘惑した。

(2) 人間は、恵みと信仰による救いをそのまま受け取ることができない。

(3) その救いが高価であればあるほど、自分もそこに貢献したと思っている。

(4) 悪魔は、人間の本質的な欲望に訴えかけてくる。

(5) もし救われるために人間の業が必要なら、それは「ほかの福音」である。

3. 聖霊がもたらす救い

(1) 聖霊は、罪人の心に働きかけ、福音を信じるように促す。

①ヨハ 6 : 37

Joh 6:37 父がわたしに与えてくださる者はみな、わたしのもとに来ます。そして、わたしのもとに来る者を、わたしは決して外に追い出したりはしません。

(2) 聖霊は、信者の内に宿り、聖化のプロセスを導かれる。

①使 5 : 32

Act 5:32 私たちはこれらのことの証人です。神がご自分に従う者たちにお与えになった聖霊も証人です。」

②使 9 : 17

Act 9:17 そこでアナニアは出かけて行って、その家に入り、サウロの上に手を置いて言った。「兄弟サウロ。あなたが来る途中であなたに現れた主イエスが、私を遣わされました。あなたが再び見えるようになり、聖霊に満たされるためです。」

③使 10 : 44

Act 10:44 ペテロがなおもこれらのことを話し続けていると、みことばを聞いていたすべての人々に、聖霊が下った。

④ロマ 15 : 16

Rom 15:16 異邦人のためにキリスト・イエスに仕える者となったからです。私は神の福音をもって、祭司の務めを果たしています。それは異邦人が、聖霊によって聖なるものとされた、神に喜ばれるささげ物となるためです。

⑤2 コリ 3 : 8

2Co 3:8 御霊に仕える務めは、もっと栄光を帯びたものにならないでしょうか。

(3) ルカ 12 : 32

Luk 12:32 小さな群れよ、恐れることはありません。あなたがたの父は、喜んであなたがたに御国を与えてくださるのです。

①恵みによって私たちを救うことは、神にとって喜びである。

ガラテヤ 8回
「異邦人とアブラハム契約」
ー聖書に基づく議論ー
ガラ 3：6～14

1. はじめに

(1) ガラテヤ人への手紙の位置づけ

- ①ガラテヤ地方の諸教会は、律法主義者の教えの影響を受けた。
- ②パウロは、律法主義者の教えに反論する必要を感じ、この書簡を書いた。

(2) ガラテヤ人への手紙のアウトライン

- ①個人的弁明：パウロの使徒職（1：1～2：21）
- ②教理的教え：信仰義認（3：1～4：31）
- ③実践的教え：キリスト者の自由（5：1～6：18）

(3) 文脈の確認

- ①3章から、ガラテヤ人たちに対する教理的教えが始まる。

* 体験に基づく議論（1～5節）

* 聖書に基づく議論（6～14節）

* 論理に基づく議論（15～29節）

- ②今回は、聖書に基づく議論（6～14節）を取り上げる。

* パウロは、旧約聖書から論じる。これが4章の最後まで続く。

* 律法主義者たちは、旧約聖書の教えに従っていると自負していた。

* パウロは、彼らが誇りとしていた旧約聖書を用いて彼らを論駁する。

* 新約聖書が存在していない。旧約聖書から論じるのは、当然である。

* 旧約聖書には、福音が含まれている。

2. メッセージのアウトライン

- (1) アブラハムの信仰（6～9節）
- (2) 律法の行い（10～12節）
- (3) キリストの御業（13～14節）

3. 結論

- (1) 聖書の権威
- (2) アブラハム契約と異邦人

旧約聖書に基づく議論について学ぶ。

I. アブラハムの信仰（6～9 節）

1. 6～7 節

Gal 3:6 「アブラハムは神を信じた。それで、それが彼の義と認められた」とあるとおりです。

Gal 3:7 ですから、信仰によって生きる人々こそアブラハムの子である、と知りなさい。

(1) 律法主義者たちは、自分たちは旧約聖書の教えに立っていると自負していた。

- ①特に、モーセの律法を誇りとしていた。
- ②パウロは、彼らの土俵に乗って議論を展開する。
- ③モーセよりも約 500 年遡って、アブラハムを取り上げる。
- ④アブラハムは、ユダヤ民族とユダヤ教の源流である。
- ⑤律法主義者は、自分がアブラハムの子孫であることを誇りとしていた。

(2) パウロは、創 15 : 6 を引用する。

Gen 15:6 アブラムは【主】を信じた。それで、それが彼の義と認められた。

- ①アブラハムは、神には約束されたことを成就する力があると信じた。
 - *これは、福音の三要素を信じたということではない。
 - *「あなたの子孫は、このようになる」という約束を信じたのである。
- ②神を彼の信仰を受け入れ、彼を義と認めた。
 - *これは、パウロの議論の鍵になる聖句である。
- ③アブラハムには、誇るものは何もない。
- ④アブラハムは、割礼を受ける前に信仰によって義とされた
 - *創 17 : 24 は、それを証明している。

Gen 17:24 アブラハムが包皮の肉を切り捨てられたときは、九十九歳であった。

(3) パウロは、アブラハムが信仰によって救われたという真理を適用する。

- ①信仰によって生きる人々こそ、真のアブラハムの子である。
- ②ユダヤ人も異邦人も、信仰によって義とされたなら、アブラハムの霊的子孫となったのである。
- ③異邦人は、先ずユダヤ教に改宗する必要はない。

2. 8 節

Gal 3:8 聖書は、神が異邦人を信仰によって義とお認めになることを前から知っていたので、アブラハムに対して、「すべての異邦人が、あなたによって祝福される」と、前もって福音を告げました。

(1) このことは、創世 12:3 の教えと合致している（創世 15:6 に次いで重要）。

Gen 12:3 わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、／あなたを呪う者をのろう。／地のすべての部族は、／あなたによって祝福される。」

- ①アブラハムを通して、地上のすべての民が祝福を受ける。
- ②無割礼の異邦人の救いは、アブラハム契約の中で予想されていた。
- ③これは、「福音」（グッドニュース）である。
- ④アブラハム契約は、シナイ契約よりも重要である。

3. 9 節

Gal 3:9 ですから、信仰によって生きる人々が、信仰の人アブラハムとともに祝福を受けるのです。

- (1) 祝福は、すべての民に提供された。
 - ①しかし、それを受け取るのは、信仰を持った人々だけである。
 - ②その人たちは、アブラハムと同じ方法で、祝福を受け取る。

II. 律法の行い (10～12 節)

1. 10～11 節

Gal 3:10 律法の行いによる人々はみな、のろいのもとにあります。「律法の書に書いてあるすべてのことを守り行わない者はみな、のろわれる」と書いてあるからです。

Gal 3:11 律法によって神の前に義と認められる者が、だれもないということは明らかです。「義人は信仰によって生きる」からです。

- (1) 律法に依存することは、論理に反する（不条理である）。
 - ①パウロは、申 27:26 を引用する。

Deu 27:26 「このみおしえのことばを守ろうとせず、これを実行しない者はのろわれる。」民はみな、アーメンと言いなさい。

- ②律法は完璧を要求する。
- ③完璧でない者はみな、のろわれる。
- ④すべての人は、どこかの時点で失敗する。
- ⑤それゆえ、律法によって義と認められる者がいなというのは、明らかである。

- (2) さらにパウロは、ハバクク 2:4 を引用する。

Hab 2:4 見よ。彼の心はうねばれていて直ぐでない。／しかし、正しい人はその信仰によって生きる。」

- ①信仰義認の真理は、旧約聖書に啓示されている。
- ②「義人は信仰によって生きる」とは、信仰によって義とされた人は、永遠の

いのちを持つということである。

2. 12 節

Gal 3:12 律法は、「信仰による」ではありません。「律法の掟を行う人は、その掟によって生きる」のです。

(1) 律法と信仰の両方が必要ではないかという人がいるかもしれない。

①律法と信仰は、対立する概念であり、両立は不可能である。

(2) 律法の掟を示すために、レビ 18 : 5 が引用される。

Lev 18:5 あなたがたは、わたしの掟とわたしの定めを守りなさい。人がそれらを行うなら、それらによって生きる。わたしは【主】である。

①律法を行う人は、それを完璧に行わなければ、義とされない。

②律法は、それを行う人に有罪宣言を与える。

③有罪宣言を受けた人は、信仰によって神の前にひれ伏すしかなくなる。

*律法は、私たちをキリストに導く養育係である。

Ⅲ. キリストの御業 (13～14 節)

1. 13 節

Gal 3:13 キリストは、ご自分が私たちのためにのろわれた者となることで、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。「木にかけられた者はみな、のろわれている」と書いてあるからです。

(1) 律法によって呪いを受けた者には、希望がある。

①その希望は、人の内ではなく、キリストの内にある。

(2) キリストは、呪いから解放される道を用意してくださった。

①キリストは、罪人たちのために、のろわれた者となられた。

②それは、罪人たちを律法ののろいから贖い出すためである。

③つまり、律法に違反した者たちの罰を自分の身に受けてくださった。

④律法ののろいは、罪人たちから罪のないお方転嫁された。

⑤1 ペテ 3 : 18

1Pe 3:18 キリストも一度、罪のために苦しみを受けられました。正しい方が正しくない者たちの身代わりになられたのです。それは、肉においては死に渡され、霊においては生かされて、あなたがたを神に導くためでした。

(3) パウロは、申 21 : 23 を引用する。

Deu 21:23 その死体を次の日まで木に残しておいてはならない。その日のうちに必ず埋葬しなければならない。木にかけられた者は神にのろわれた者だからである。あなたの神、**【主】**が相続地としてあなたに与えようとしておられる土地を汚してはならない。

- ①重大な罪を犯した者は、石打の刑に処された。
- ②その死体を、見せしめのために木にかけた。
- ③呪われた死であることを示すために、木にかけたのである。
- ④それゆえ、十字架の死は、ユダヤ人たちにとっては「つまずき」となった。
- ⑤しかし、その意味を理解した人には、信じる根拠となった。

2. 14 節

Gal 3:14 それは、アブラハムへの祝福がキリスト・イエスによって異邦人に及び、私たちが信仰によって約束の御霊を受けるようになるためでした。

(1) キリストの贖いの業の目的

- ①信仰による義認が、異邦人にも及ぶためである。
 - *これは、アブラハムが受けたのと同じ祝福である。
- ②信仰によって義とされた人たちが、聖霊を受けるためである。
 - *聖霊は、聖化をもたらすお方である。

結論：

1. 聖書の権威

(1) ガラ 3：8

Gal 3:8 聖書は、神が異邦人を信仰によって義とお認めになることを前から知っていたので、アブラハムに対して、「すべての異邦人が、あなたによって祝福される」と、前もって福音を告げました。

(2) パウロは、「聖書は、『〇〇』と、前もって福音を告げた」と書いている。

- ①聖書の擬人化である。
 - *聖書は、預言者である。
 - *聖書のことばは、神のことばである。

(3) この聖句は、聖書の十全靈感を支持している。

①2 テモ 3：16

2Ti 3:16 聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。

②2 ペテ 1：20～21

2Pe 1:20 ただし、聖書のどんな預言も勝手に解釈するものではないことを、まず心得ておきなさい。

2Pe 1:21 預言は、決して人間の意志によってもたらされたものではなく、聖霊に動かされた人たちが神から受けて語ったものです。

2. アブラハム契約と異邦人

(1) アブラハム契約は、地上のすべての民に適用される。

- ①土地の約束は、アブラハムの肉の子孫に与えられている。
- ②霊的祝福の約束は、アブラハムの霊的な子孫に与えられている。
- ③賜物としての聖霊は、その祝福の一部である。

(2) 聖霊の約束は、最初イスラエルに与えられていた。

①エゼ 36 : 26～28

Eze 36:26 あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を与える。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。

Eze 36:27 わたしの霊をあなたがたのうちに授けて、わたしの掟に従って歩み、わたしの定めを守り行うようにする。

Eze 36:28 あなたがたは、わたしがあなたがたの先祖に与えた地に住み、あなたがたはわたしの民となり、わたしはあなたがたの神となる。

②ヨエ 2 : 28～29

Joe 2:28 その後、わたしは／すべての人にわたしの霊を注ぐ。／あなたがたの息子や娘は預言し、／老人は夢を見、青年は幻を見る。

Joe 2:29 その日わたしは、男奴隷にも女奴隷にも、／わたしの霊を注ぐ。

(3) ガラ 3 : 14

Gal 3:14 それは、アブラハムへの祝福がキリスト・イエスによって異邦人に及び、私たちが信仰によって約束の御霊を受けるようになるためでした。

- ①私たちは、信仰によって義とされる。
- ②私たちは、信仰によって約束の聖霊を受ける。
- ③私たちは、信仰によって義認と聖化を経験する。

ガラテヤ 9 回
「キリストにあって一つ」
ー論理に基づく議論ー
ガラ 3 : 15～29

1. はじめに

(1) ガラテヤ人への手紙の位置づけ

- ①ガラテヤ地方の諸教会は、律法主義者の教えの影響を受けた。
- ②パウロは、律法主義者の教えに反論する必要を感じ、この書簡を書いた。

(2) ガラテヤ人への手紙のアウトライン

- ①個人的弁明：パウロの使徒職（1：1～2：21）
- ②教理的教え：信仰義認（3：1～4：31）
- ③実践的教え：キリスト者の自由（5：1～6：18）

(3) 文脈の確認

- ①3 章から、ガラテヤ人たちに対する教理的教えが始まる。
 - *パウロは、旧約聖書から論じる。これが 4 章の最後まで続く。
 - *律法主義者たちは、旧約聖書の教えに従っていると自負していた。
 - *パウロは、彼らが誇りとしていた旧約聖書を用いて彼らを論駁する。

②3 章の内容

- *体験に基づく議論（1～5 節）
- *聖書に基づく議論（6～14 節）
- *論理に基づく議論（15～29 節）

- ③今回は、論理に基づく議論（15～29 節）を取り上げる。

2. メッセージのアウトライン

- (1) 契約の普遍性（15～18 節）
- (2) 律法の目的（19～25 節）
- (3) 信者の地位（26～29 節）

3. 結論

- (1) アブラハム契約の内容
- (2) アブラハムの子孫の意味

論理に基づく議論について学ぶ。

I. 契約の普遍性（15～18節）

1. 15～16節

Gal 3:15 兄弟たちよ、人間の例で説明しましょう。人間の契約でも、いったん結ばれたら、だれもそれを無効にしたり、それにつけ加えたりはしません。

Gal 3:16 約束は、アブラハムとその子孫に告げられました。神は、「子孫たちに」と言って多数を指すことなく、一人を指して「あなたの子孫に」と言っておられます。それはキリストのことです。

(1) パウロは、律法主義者たちの反論を想定し、それに対する回答を用意する。

①彼らはこう反論するであろう。

*アブラハムが恵みと信仰によって義とされたことは、認める。

*しかし、その後与えられた律法により、義とされる方法は変更された。

②そこでパウロは、「人間の例」を用いて説明する。

③「人間の例」とは、ローマ法の慣習のことである。

(2) ローマ法では、一度結ばれた契約は、無効にしたり、何かを付け加えたりはできない。

①人間の契約が不変だと言うなら、神の契約はもっとそうである。

②アブラハムとその子孫に与えられた約束は、律法が与えられる前に成就したわけではない。

③律法が与えられた時点で、その約束は依然として有効であった。

④つまり、律法によって神の約束が変更されることはないのである。

(3) アブラハムとその子孫に与えられた約束は、キリストにあって成就した。

①「あなたの子孫に」は単数形であり、キリストのことである。

②「子孫」はギリシア語で「スペルマ」、ヘブル語で「ゼラ」である。

*この言葉は、文字通りには「種」であり、比喩的には「子孫」である。

*この言葉は単数形であるが、集合名詞として「子孫」を指す場合もある。

*この言葉が単数形であることを基に、パウロはそれをキリストに適用。

③マタイ 1:1 は、キリストがアブラハムの子孫であることを記している。

Mat 1:1 アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図。

④キリストは永遠のお方なので、キリストにあって成就した約束も永遠である。

*つまり、信仰によって義とされることは、永遠の約束である。

2. 17～18節

Gal 3:17 私の言おうとしていることは、こうです。先に神によって結ばれた契約を、その後四百三十年たってできた律法が無効にし、その約束を破棄することはありません。

Gal 3:18 相続がもし律法によるなら、もはやそれは約束によるものではありません。しかし、神は約束を通して、アブラハムに相続の恵みを下さったのです。

(1) 神がアブラハムと結んだ契約は、430 年後にできた律法の影響を受けない。

①430 年は、ヤコブとの契約の更新から数えてのことであろう(創 46:1～4)。

②出 12 : 40

Exo 12:40 イスラエルの子らがエジプトに滞在していた期間は、四百三十年であった。

(2) 相続は、約束によるか、律法によるかのいずれかである。

①神が与えた相続の恵みは、約束による。

②相続の恵みとは、恵みと信仰による救いのことである。

Ⅱ. 律法の目的 (19～25 節)

1. 19～20 節

Gal 3:19 それでは、律法とは何でしょうか。それは、約束を受けたこの子孫が来られるときまで、違反を示すためにつけ加えられたもので、御使いたちを通して仲介者の手で定められたものです。

Gal 3:20 仲介者は、当事者が一人であれば、いりません。しかし約束をお与えになった神は唯一の方です。

(1) ここでもパウロは、律法主義者たちの質問を想定して回答を提供している。

①律法が救いを提供しないなら、シナイ契約でなぜ律法が与えられたのか。

(2) パウロは、律法の目的と性質を説明する。

①律法は、違反を示すためにつけ加えられた。

＊律法は、罪を指摘する。

＊罪を犯した者の上に、神の怒りが留まる。

②律法は一時的であり、メシアが来られるまでの間だけ機能するものである。

③律法は、約束よりも劣っている。

＊約束は、神が直接アブラハムに与えたものである。

＊律法は、仲介者（モーセ）を通して制定されたものである。

＊実際は、2 種類の仲介者がいた。

・天使たちは神を代表し、モーセはイスラエルの民を代表した。

(3) 20 節の訳は、新共同訳が分かりやすい。

Gal 3:20 仲介者というものは、一人で事を行う場合には要りません。約束の場合、神はひとりで事を運ばれたのです。（新共同訳）

- ①アブラハム契約は片務契約である。
- ②神だけが責任を負う。
- ③それゆえ、仲介者は不要である。

2. 21～22 節

Gal 3:21 それでは、律法は神の約束に反するのでしょうか。決してそんなことはありません。もし、いのちを与えることができる律法が与えられたのであれば、義は確かに律法によるものだったでしょう。

Gal 3:22 しかし聖書は、すべてのものを罪の下に閉じ込めました。それは約束が、イエス・キリストに対する信仰によって、信じる人たちに与えられるためでした。

(1) 次に想定されている質問は、律法と神の約束は矛盾するのか、である。

- ①パウロは、「決してそんなことはありません」と答える。
- ②ギリシア語の「メイ・ゲノイト」は、強意の否定である。
- ③約束と律法には、それぞれ異なった目的がある。

(2) 律法の目的は、いのちを与えることではない。

- ①理論的には、律法を完全に守れるなら、律法による救いは可能である。
- ②しかし、律法を完璧に守れる人はいない。
- ③ロマ 8：3～4

Rom 8:3 肉によって弱くなったため、律法にできなくなったことを、神はしてくださいます。神はご自分の御子を、罪深い肉と同じような形で、罪のきよめのために遣わし、肉において罪を処罰されたのです。

Rom 8:4 それは、肉に従わず御霊に従って歩む私たちのうちに、律法の要求が満たされるためなのです。

④申命 8:1 は、律法を守ろうと努力する人に地上生活の祝福を約束している。

Deu 8:1 私が今日あなたに命じるすべての命令を、あなたがたは守り行わなければならない。そうすれば、あなたがたは生きて数を増やし、【主】があなたがたの父祖たちに誓われた地に入って、それを所有することができる。

(3) 律法は、福音への道を用意した。

①律法によって罪を示された人は、呪いの下に置かれる（ロマ 3：23～24）。

Rom 3:23 すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、

Rom 3:24 神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いを通して、価なしに義と認められるからです。

3. 23～25 節

Gal 3:23 信仰が現れる前、私たちは律法の下で監視され、来たるべき信仰が啓示されるまで閉じ込められていました。

Gal 3:24 こうして、律法は私たちをキリストに導く養育係となりました。それは、私たちが信仰によって義と認められるためです。

Gal 3:25 しかし、信仰が現れたので、私たちはもはや養育係の下にはいません。

(1) 次にパウロは、2つの例を用いて律法の役割を解説する。

①牢獄の例

*キリストの到来まで、私たちは律法に監視され、閉じ込められていた。

*ここでの「私たち」とは、ユダヤ人たちである。

②養育係の例

*律法は、私たちをキリストに導く養育係となった。

*信仰による義を獲得するためである。

*キリストが現れたので、私たちは養育係の下にはいない。

Ⅲ. 信者の地位 (26～29 節)

1. 26～27 節

Gal 3:26 あなたがたはみな、信仰により、キリスト・イエスにあって神の子どもです。

Gal 3:27 キリストにつくバプテスマを受けたあなたがたはみな、キリストを着たのです。

(1) 主語が、「あなたがた」に変化している。ガラテヤの信徒たちのことである。

①信仰義認の説明が、ここでクライマックスを迎える。

②信仰は、3つの変化をもたらす。

(2) 第1の変化：信者はみな、神の子どもとなった。

①信者は、「キリスト・イエスにあって」神の子どもとなった。

*「子ども」はギリシア語で「ヒュイオス」（複数形ヒュイオイ）である。

*キリストにある成人、息子・娘である。

*律法が養育係であったときは、未成年であった。

②キリストを信じた人は、聖霊によりバプテスマされた（キリストと一体化）。

③「キリストを着た」とは、キリストが与える義の衣を着たということである。

*ローマ社会では、15歳になるとトーガの着用を許された。

*トーガは、その家の息子としての特権を引き継いだことを示すしるし。

2. 28 節

Gal 3:28 ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。

(1) 第2の変化：信者はみなキリスト・イエスにあって一つとされた。

①ユダヤ人は、こう祈っていた。

＊「私は、異邦人でもなく、奴隷でもなく、女でもないことを感謝します」

②パウロは、この祈りを前提に、キリストにある一致を教えている。

③信者の間に、霊的格差はなくなった。

＊ユダヤ人信者と異邦人信者の区別はない。

＊奴隷の信者と自由人の信者の区別もない。

＊男性の信者と女性の信者の間の区別もない。

④信者はすべて同じ霊的特権と地位に与っている。

3. 29 節

Gal 3:29 あなたがたがキリストのものであれば、アブラハムの子孫であり、約束による相続人なのです。

(1) 第3の変化：信者は、アブラハムの子孫であり、約束による相続人となった。

①パウロは、アブラハムの子孫とはキリストのことだと論じた（16、19 節）。

②信者はキリストと一体化した（キリストを着た）。

③それゆえ、信者はアブラハムの子孫の一部となった。

④信者は、アブラハムとその子孫に与えられた約束の相続人となった。

結論：

1. アブラハム契約の内容

(1) 創 12：1～3

Gen 12:1 【主】はアブラムに言われた。／「あなたは、あなたの土地、／あなたの親族、あなたの父の家を離れて、／わたしが示す地へ行きなさい。

Gen 12:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、／あなたを祝福し、／あなたの名を大いなるものとする。／あなたは祝福となりなさい。

Gen 12:3 わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、／あなたを呪う者をのろう。／地のすべての部族は、／あなたによって祝福される。」

①土地の約束

②子孫の約束

③祝福の約束

＊この約束だけが、異邦人にも与えられる。

(2) 創 15 章で、正式な契約締結の儀式が行われた。

- ①アブラハムは、深い眠りに襲われた。
- ②切り裂かれた物の間を、煙の立つかまどと燃えているたいまつが、通り過ぎた。
- ③神だけが責任を持つ片務契約である。
- ④人間の側の失敗によって、無効になる契約ではない。
- ⑤ これを無条件契約と言う。

2. アブラハムの子孫の意味

(1) ガラ 3 : 29

Gal 3:29 あなたがたがキリストのものであれば、アブラハムの子孫であり、約束による相続人なのです。

- ①この聖句を根拠に、教会は霊的イスラエルであると主張する人がいる。
- ②この立場を、置換神学を呼ぶ。
- ③しかしこれは、ここでの文脈を無視した自分勝手な解釈である。

(2) アブラハムの肉の子孫は、ヤコブから出たイスラエルの 12 部族である。

- ①この肉の子孫の中に、少数の真の信仰者（レムナント）がいる。
- ②彼らは、肉のイスラエルの中にいる霊的イスラエルである。
- ③彼らは、アブラハムの霊的子孫である。

(3) アブラハムの肉の子孫でない者たち（異邦人）の中から、信仰者が出る。

- ①彼らもまた、アブラハムの霊的子孫となる。
- ②彼らは、信仰による義認を受け、3 つの変化を体験する。

(4) イスラエルと教会は、別のグループである。

- ①神は、それぞれのために計画を持っておられる。
- ②教会が携挙されると、イスラエルに対する計画が成就に向けて動き始める。

ガラテヤ 10回
「神の時は満ちた」
ーディスペンセーションに基づく議論ー
ガラ 4：1～11

1. はじめに

(1) ガラテヤ人への手紙の位置づけ

- ①ガラテヤ地方の諸教会は、律法主義者の教えの影響を受けた。
- ②パウロは、律法主義者の教えに反論する必要を感じ、この書簡を書いた。

(2) ガラテヤ人への手紙のアウトライン

- ①個人的弁明：パウロの使徒職（1：1～2：21）
- ②教理的教え：信仰義認（3：1～4：31）
- ③実践的教え：キリスト者の自由（5：1～6：18）

(3) 文脈の確認

- ①3～4章は、ガラテヤ人たちに対する教理的教えである。
 - *パウロは、旧約聖書から論じる。
 - *律法主義者たちが誇りとしていた旧約聖書を用いて彼らを論駁する。

②4章の内容

- *ディスペンセーションに基づく議論（1～11節）
- *感情に基づく議論（12～20節）
- *比喩に基づく議論（21～31節）

- ③今回は、ディスペンセーションに基づく議論（1～11節）を取り上げる。

④ディスペンセーションの定義

「神の計画が進展していく過程において出現する、明確に区分可能な神の経綸」

2. メッセージのアウトライン

- (1) ローマ法の規定（1～2節）
- (2) 霊的適用（3～7節）
- (3) パウロの心配（8～11節）

3. 結論

- (1) 成人になる年齢
- (2) 現代の律法

ディスペンセーションに基づく議論について学ぶ。

I. ローマ法の規定（1～2 節）

1. 1～2 節

Gal 4:1 つまり、こういうことです。相続人は、全財産の持ち主なのに、子どもであるうちは奴隷と何も変わらず、

Gal 4:2 父が定めた日までは、後見人や管理人の下にあります。

(1) パウロは、律法をいろいろな人物にたとえている。

①監獄の獄吏（3：22）

②養育係（3：24）

③ここでは、後見人と管理人にたとえられる。

④以上の 3 つのたとえの目的は、かつての霊的幼子の状態と、今の霊的成人になった状態を対比させることである。

(2) 「つまり、こういうことです」

①パウロは、2 つの言葉を使い分けている。

②「ヒュイオス」は、成人である。

③「ネイピオス」は、未成年である。

*「言葉を話さない」という意味である。

*知的に、道徳的に、未熟な年齢である。

④キリスト・イエスにある者は、霊的成人（ヒュイオス）である。

⑤律法の下にいる者は、霊的幼子（ネイピオス）である。

⑥未成年の相続人は、以下のような状態に置かれている。

*彼は、法的には全財産の持ち主である。

*しかし、財産を運用する自由がないので、実体は奴隷と変わらない。

*成人するまでは、後見人や管理人の下に置かれる。

*後見人は、「これをせよ」「これをしてはならない」と指図する。

*管理人は、未成年の相続人の財産を守る。

*後見人と管理人は、同一人物であることが多かった。

*父方の最も近い親戚に当たる男性が、その役を担うことが多かった。

(3) 「父が定めた日までは」

①ローマ法では、子どもが成人する日は父によって決められる。

*通常は 15 歳。

②トーガを着せる儀式が成人式となる。

II. 霊的適用（3～7節）

1. 3節

Gal 4:3 同じように私たちも、子どもであったときには、この世のもろもろの霊の下に奴隷となっていました。

- (1) パウロは、ローマ法の規定を信者に適用する。
 - ①信者の過去の地位と、キリストの十字架以降の地位を対比させている。
 - ②これは、信者になる前となった後の対比ではない。
 - ③古いディスペンセーションと新しいディスペンセーションの対比である。
 - ④つまりこれは、個人的救いへの言及ではなく、救済史への言及である。
 - ⑤かつてユダヤ人たちは、「この世のもろもろの霊」の下に奴隷となっていた。

- (2) 「この世のもろもろの霊」とは何か。

- ①むしろ、「この世の基本原理」と訳すべきであろう。
 - *英語では「rudiments」（ASV）である。
 - *基本原理とは、ユダヤ教の幼稚な教えである。
- ②ユダヤ教の律法は、霊的真理を教えるための視聴覚教材である。
- ③割礼、諸々の儀式、食物規定などがそれである。
 - *子どもが、絵を通して実際の物体について学ぶことに似ている。
 - *ユダヤ教は影であり、キリスト教が実体である。
- ④ユダヤ人たちは、ユダヤ教の幼稚な教えの下で奴隷となっていた。
- ⑤キリストが来られて、奴隷となっている人たちを解放されたのである。

2. 4節

Gal 4:4 しかし時が満ちて、神はご自分の御子を、女から生まれた者、律法の下にある者として遣わされました。

- (1) 「時が満ちて」

- ①父なる神が、相続人が成人となるために定めていた時が来たという意味。
- ②この言葉は、ディスペンセーションが新しくなったことを示している。
- ③神は、歴史の支配者であり、すべてのことに時を定めておられる。
- ④携挙や再臨も、神が定めた時に起こる。

- (2) 「神はご自分の御子を、女から生まれた者、」

- ①イエスは、神の御子（神性を持っておられる）である。
- ②イエスが単なる人なら、「女から生まれた者」という表現は無意味である。
- ③この表現は、神の御子の受肉を表わしている。

＊神の子が、人となられた。

(3) 「律法の下にある者として遣わされました」

①イエスは、人としては、ユダヤ人として誕生された。

②それゆえ、律法の下に置かれた。

③イエスは、ご自分が定めた律法の下にご自分を置かれた。

＊それは、律法の素晴らしさをご自身の生涯を通して示すためである。

＊また、律法の呪いをご自身の身に受けるためである。

3. 5 節

Gal 4:5 それは、律法の下にある者を贖い出すためであり、私たちが子としての身分を受けるためでした。

(1) 律法は、その命令に違反した者に死を要求する。

①「私たち」とは、ユダヤ人である。

②私たちが子としての身分を受けるために、代価が払われた。

(2) イエスは、人類の一員、ユダヤ民族の一員として来られ、律法が要求する代価を支払ってくださった。

①神の子の死は、すべての人の罪を贖うために十分である。

②神の子は、人間の子として死に、人間の子が神の子になれるようにされた。

(3) 信者は、イエスを信じた瞬間に成人として神の家族に受け入れられる。

①子として養子に迎えらる。

②養子とは、別の親の子を自分の子として迎えた場合に使う言葉である。

③聖書では、養子という言葉は、成人した子に与えられる特権に与ることに強調点がある。

4. 6～7 節

Gal 4:6 そして、あなたがたが子であるので、神は「アバ、父よ」と叫ぶ御子の御霊を、私たちの心に遣わされました。

Gal 4:7 ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子であれば、神による相続人です。

(1) 「私たち」から「あなたがた」に変わっている。

①父なる神は、信じた者に御子を遣わただけでなく、御霊も遣わされた。

＊救いには、三位一体の神全体が関わっている。

＊聖霊は、すべての信者に与えられる賜物である。

②聖霊は信者の心に内住し、神の子とされていることを確信させてくださる。

③信者は、聖霊に導かれて、「アバ、父よ」と祈るようになる。

＊「アバ」は、アラム語で父という意味である。

＊小さな子どもが父親に呼びかけるときに使う言葉である。

④ロマ8:15

Rom 8:15 あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隷の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。この御霊によって、私たちは「アバ、父」と叫びます。

⑤これは、信者と父なる神との親密さを示す呼びかけである。

⑦奴隷は、家の主人に対してこの呼びかけを使うことができない。

(2) 「あなたがた」（6節）から「あなた」（7節）への変化がある。

①複数形から単数形への変化は、この真理の個人的適用を示している。

②すべての信者は、奴隷ではなく、子である。

③神の家族においては、子とされたことは相続人になったことである。

Ⅲ. パウロの心配（8～11節）

1. 8節

Gal 4:8 あなたがたは、かつて神を知らなかったとき、本来神ではない神々の奴隷でした。

(1) ここでパウロは、論理的説明を一旦中止して、自らの感情を表に出す。

①信者になる前のガラテヤ人たちは、偶像の奴隷であった。

②彼らは、ゼウスやヘルメスなどの偶像を礼拝していた（使 14:11～13）。

2. 9節

Gal 4:9 しかし、今では神を知っているのに、いや、むしろ神に知られているのに、どうして弱くて貧弱な、もろもろの霊に逆戻りして、もう一度改めて奴隷になりたいと願うのですか。

(1) しかし、偶像礼拝者であった彼らに、大きな転機がやって来た。

①彼らは、真の神を知るようになった。

＊これは、人間の視点から見た救いである。

②いや、むしろ神に知られるようになった。

＊これは、神の視点から見た救いである。

③ここでの「知る」という動詞は、親密な関係、個人的な関係を表わしている。

(2) にもかかわらず、ガラテヤの信者たちは後戻りしている。

①人を奴隷にする宗教に後戻りしている。

②「弱くて貧弱な」

*弱いとは、義認も聖化も与えないということ。

*貧弱とは、相続遺産がないということ。

③「もろもろの霊」

*もろもろの霊とは、ユダヤ教の基本原理のことである（3 節）。

3. 10～11 節

Gal 4:10 あなたがたは、いろいろな日、月、季節、年を守っています。

Gal 4:11 私は、あなたがたのために労したことが無駄になったのではないかと、あなたがたのことを心配しています。

(1) ガラテヤの信者たちは、ユダヤ教の暦を守っていた。

①いろいろな日とは、安息日である。

②月とは、新月の祝いである。

③季節とは、過越の祭り、ペンテコステ、仮庵の祭りなどである。

*レビ 23 章の 7 つの祭り

④年とは、安息年、ヨベルの年などである。

(2) 彼らは、これらを守れば、神から特別な祝福が与えられと思っていた。

①その考え方が間違っていることは、すでにパウロが論じてきた通りである。

②業が救いや聖化に貢献するなら、人には自分を救う力があることになる。

③これは、神への絶対的な信頼を破壊する考え方である。

(3) パウロは、自分の労苦が無に帰することを心配している。

①それは、ガラテヤ人たちのための心配である。

結論：

1. 成人になる年齢

(1) ガラ 4：2

Gal 4:2 父が定めた日までは、後見人や管理人の下にあります。

①「父が定めた日までは」

②成人する日は、ユダヤ文化、ギリシア文化、ローマ文化と異なる。

*ユダヤ文化では 13 歳。

*ギリシア文化では 18 歳。

*ローマ文化では 14 歳～17 歳。

③ローマ法では、子どもが成人する日は父によって決められる。

④トーガを着せる儀式が成人式となる。

(2) 今日のユダヤ教の教え

①40歳になるまで、雅歌とエゼキエル書1書を読むことが許可されない。

②雅歌は、青年には性的刺激が強すぎると考えられている。

③エゼキエル1章は、シャカイナグローリーを描写した箇所である。

*タルムードの逸話:そこを読もうとした青年は、火で焼き尽くされた。

④つまり、律法の下にある人は、40歳までは成人とは見なされないのである。

*13歳のパール・ミツバは、「律法の子」となる儀式に過ぎない。

(3) ガラ4:6~7

Gal 4:6 そして、あなたがたが子であるので、神は「アバ、父よ」と叫ぶ御子の御霊を、私たちの心に遣わされました。

Gal 4:7 ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子であれば、神による相続人です。

2. 現代の律法

(1) メシアニックジューと律法

①律法を行うことによって神に喜ばれようとしているなら、間違っている。

②聖霊に導かれて律法を行っているなら、問題はない。

③人間の思いなのか、聖霊の導きなのか、判断するのは極めて難しい。

(2) 異邦人と律法

①メシアニックジューの場合と同じことが言える。

②ユダヤの祭りを祝う場合の注意点

*キリスト教のユダヤ的ルーツを学ぶことは、よいことである。

*キリストについて学ぶことも、よいことである。

*祭りを祝うことが自らの霊性を高めると考えるのは、間違っている。

(3) キリスト教の中にある現代の律法

①儀式を行うことによって聖めや祝福を得ようとする間違いが、多数ある。

②人間が定めた祭司制度や祭司の衣服(ユダヤ教の伝統からの借用)

③安息日の遵守を強調すること(土曜日から日曜日に変更されている)

④聖所、ローソク、聖水、などなど。

⑤これらの現代の律法を見て、パウロは、なんと言うだろうか。

⑥現代の律法は、恵みと信仰による聖化、聖霊による聖化を妨げる。